宮古島の牧と沖縄北部のマキ

長濱　幸男（宮古島市史編さん委員）

目次

はじめに
１節.　宮古島東北海岸の牧
１－１　保良元島の牧
１－２　大牧
１－３　牧中（砂川牧）
２節.　石垣で囲まれた城跡
２－１　高腰城跡と牧
２－２　西銘城跡と牧
２－３　手真嘉城跡と牧
２－４　久場嘉城跡
２－５　城跡と牧の考察
３節.　小島を使った牧
３－１　伊良部下地島牧
４節.　沖縄北部のマキ
４－１　北山王と貢馬
４－２　北山王と馬の飼育
４－３　マキョ・マキという言葉
４－４　マキョ（マキ）の各論説
４－５　国頭村比地のマキ（マク）
５節.　種子島の牧
５－１　種子島牧の歴史
５－２　種子島牧の８つの構成要素
６節.　まつがまマクと種子島牧の比較
６－１　まつがまマク（小玉森）
６－２　小玉森と周辺「グスク」の遺構
６－３　牧の歴史的背景
６－４　沖縄北部の牧の崩壊
７節.　日本の古代社会牧（古墳～鎌倉時代）
８節.　考察
９節.　今後の課題

はじめに

宮古島には、牧や牧畜の伝承が多い。また、旧記等にも牧に関する記録が残されている。さらに、これまでの遺跡調査から、牛や馬の遺骨が数多く見つかっている。こうした記録や資料を見聞しながら、「宮古島の牧を誰が、いつ頃、何のためにつくったのか」を考察してみたい。宮古島における牧は、人びとの生活様式や牛馬の渡来経路と時期などを探る上でも意義あることだと考える。また、宮古島への馬の渡来は、遺跡出土の馬骨などから沖縄本島経由と考えられている。宮古島と沖縄本島の馬に関するつながりを解明するため、特に沖縄北部の牧に注目した。沖縄北部の牧には、九州、薩南諸島、奄美群島との古いつながりもあり、宮古馬のルーツ解明にも重要だと考えられるからである。ところが、沖縄北部のマキについては未解明な部分が多い。グスクに関しては、数多くの研究がされ、グスク時代と時代区分にも使われている。しかし、牧に関する調査は不思議と少ないし、注目されていない。本稿では、宮古馬の渡来経路の背景を探るため、沖縄北部のグスクとマキも調べてみた。

１節．宮古島の東北海岸の牧

１－１　保良元島の牧

宮古島の東北海岸には、牧や牧畜と関係する遺跡が多い。保良元島、大牧、牧中、高腰城跡などである。このなかで、景勝地として観光客に人気のある東平安名崎には、保良元島の居住者の１人で、マムヤという美女が祀られている。

稲村（1972）は、「保良元島居住者は牛馬の牧養をして、マモヤの弟は名を正盛と呼び、姉の名は伝わらないが男嫌いでブトムミャと呼ばれている。２人は牛馬牧養の神として平安名村大家元御嶽に祭られている」と述べている。また「保良元島の居住者は海外からの渡来人で・・・生活も一般土地の者とは異なり、牛馬の牧養や機織りを主とし、衣類は絹物や麻の上布等を着用した。また当時日本上流社会の趣味とされた衣類に香をたきこめたりした。・・・・日用の器具には中国製の陶磁器類を使用して居ることを思うと、彼等は、日本、中国および南方と交易し、それと密接なる関係を持つ一団の人びとであることが考えられる」とも述べている。そして藤田豊八（1917）が「琉球人南洋通商の最古の記録」で取り上げた「婆羅公菅下密牙古人」を紹介している。藤田は、密牙古人は宮古島人のことで、婆羅公とは保良の支配者であろうという見解を示し、この婆羅の人が、1317 年にシンガポールに交易に行く途中遭難に遭い、中国の永嘉県に漂着したことを明らかにした。稲村（1972）は、保良元島附近の出土品、伝説やあやぐ等から、「婆羅公菅下密牙古人」は保良元島の居住者と深いつながりがあり、倭寇との係わりが考えられると述べている。

稲村（1972）の論説によれば、保良元島は中国との交易を行うための中継基地であり、水や燃料と航海中の食料として粟や牛肉の供給地であったことを示唆している。つまり、保良元島で牛馬を牧養していた目的は、居住者の食材はもとより貿易に出かける渡航者の食肉確保のためだったと考えられる。

稲村論説を要約すれば、①保良元島居住者であるマムヤの兄弟は、牛馬の牧養をしていた。②保良元島居住者は渡来人である。③彼等の一団は、倭寇と係わりがある。保良元島附近から明国以前の中国陶磁器が出土していることから、当時中国と交易をしていたことが明らかである。④交易をしていた時期は、『元史』や『温州府志』の記録から、1317 年頃にさかのぼることが出来る。⑤牛馬の牧養の目的は、保良元島居住者や海外交易時の食材・食肉確保のためであったことを示唆している。

以上のように保良元島の牧養に関する稲村論説は、極めて先駆的なものである。稲村説は 1965 年 H・メリヒャール氏と金子エリカ女史にる保良元島遺跡の発掘調査結果も根拠にしている。出土したのは、宮古産の土器の他、宋、元、明時代初期の中国製陶磁器片などである。このことは、1372 年から始まった琉球と明国との朝貢貿易以前に、宮古島と中国との交易が

行われていたことを意味している。

金子（1985）によれば、「当時の食料の一部分は貝であったことは、この層（一番古い包含層）から出土した貝殻によってわかりますが、その量を考えれば、貝類は食料の主たる源であったとは考えられません。・・・・この層から牛と豚の骨が始めて出土しました。獣骨の鑑定をして下さった故林田重幸先生は保良(元島)出土の牛の骨の量におどろかれました」。また「この土質で農業は可能であったかも知れないが、石の非常に多いこの地区は、むしろ牧草地に適したものと思われます」とも報告している。豚の骨と断言していることは、検討の余地があるが、牛の骨が多いという実態と馬の骨が出土していないことは、正しく受け止める必要がある。なぜならば、稲村論説では「牛馬の牧養」と述べているが、保良元島の遺跡調査では馬の存在は、今のところ不明である。なお、マムヤの井戸はゴルフ場の中にあるが、その西側に湧水があったことを吉野の人たちは確認している（根間克則氏の証言）。この場所が、保良元島牧の水飲み場だったと思われる。

藤田（1917）が学会に報告した「婆羅公菅下の密牙古人」にかんする論説は、『宮古島市史』第一巻でも取り上げられ、婆羅（保良）の公（リーダー）の影響力が、近隣の大牧や、野城、高腰城にとどまらず、友利元島や砂川元島まで広がっていたとの見解を示している（下地 2012）。この根拠として、保良元島で出土した野城式土器、玉縁白磁碗、カムィヤキなど広がりを取り上げている。

宮古島の遺跡調査で、明国との朝貢貿易以前の交易品・ビロースクタイプや今帰仁タイプの陶磁器が出土している。これも、藤田論文の裏付けとなるものである。

婆羅という地名については、保良を比定しているが、保良元島周辺の吉野海岸は、もともと「バラ海岸」と称され、海は「バラ・イム」と呼ばれていた（『吉野創立 50 周年記念誌』）。

保良元島の牧を考える上で、見落とせないものがある。御嶽の存在である。牧と御嶽は深いつながりがあると考える。牧は、管理する人間がいて成り立つ。牧の中にある御嶽には、最初は牧畜の守護神が祀られ、その後は牧人の祖先神も祀られたと考える。保良元島御嶽に現在祀られている神は、富をもたらす神で「ツカサカム・パツマル」、「パツマル・ウンツヌス」「ムトズマ・オブツヌス」だと伝えられている。元島東隣には「バカボウ御嶽」があり、ここには「貿易と牧畜を奨励した神」が祀られている。元島西側には「まだま御嶽」があり、ここには「航海安全の神」が祀られている（『平良市史』御嶽編）。「まだま（真玉）」については、狩俣の古謡・フサやタービに詠われており、祖先神を意味しているようである。

１－２　大牧

大牧は城辺地区吉野集落の北方に位置し、海岸沿いの丘陵地である。標高 70～88 ㍍のとこ

ろに、南西に向かって平地が広がっている。東隣には保良元島があり、西隣は新城海岸となっている。1916（大正５）年農商務省農務局の調査によれば、大牧は 186.1 ヘクタール（放牧地 19.6 ヘクタール、耕地 156.5 ヘクタール、その他 10.0 ヘクタール）となっている（『宮古畜産史』）。この規模は、大牧遺跡付近だけでなく、カームイ嶺遺跡まで含まれる。

大牧の利用目的について、「与世山親方規模帳」（1767）に詳細な記録が残されている。

> 140 条　牛は耕作の助けになり、宮古島はとりわけ繁殖させる手段がなければならないのに、その考えもなく百姓どもは牛の所有が少なく、毎年の御用の牛皮も調えかね重要な耕作に差し支えにもなっているという。それで今後は大牧のうちの畑作は禁止し、1 ヵ村から雌牛を２～３疋ずつ放牧し、最寄りの組合で頭迦（すぐれもの）のうちから、しっかりした者を１人ずつ番人とする。村々の曖役人と耕作筆者で取りまとめ、年に１度ずつ自分の牛を放牧し主なることを相談し、村々から蔵元へ報告する決まりを申し渡すべきこと。附　伊良部の牛牧も同じ。（与世山親方規模帳）

「与世山親方規模帳」からは、次のことが明らかである。①大牧が牛牧として使用されたこと。②開墾した畑作は禁止され、放牧地として重視されたこと。③宮古島の各村々から、２～３頭の繁殖雌牛が持ち込まれ、牛の増殖の場として使われたこと。④管理人を最寄りの組合から出させたこと。大牧の最寄りと言えば、新城村や保良村にあたる。この両村が大牧の管理組合をつくり、牛を放牧していたことが窺われる。また、大牧の中には砂川牧や友利牧もあったことから、これらの村からも、牧の番人が出たかも知れない。

大牧については、遺跡発掘調査が行われている。旧城辺町教育委員会（1987）が実施した、『大牧遺跡・野城遺跡－範囲確認調査報告書－』である。丘陵地の前面の原野部分に於いて発掘調査を行い、遺物包含層（第Ⅱ層）を確認している。出土物としては中国産の玉縁白磁碗、褐釉陶器、徳之島産のカムィヤキ、それに宮古島産の野城式土器である。牛骨や石積みなどの遺構は確認されていない。この遺跡は牧場の中で、牧人が住んでいた跡地の 1 つと考えられる。出土物からは 11 世紀から 13 世紀頃の遺跡とみられている（久貝 2011「11～13 世紀における宮古の遺跡について」『沖縄考古学会 2011 年研究発表会』。

『大牧・野城調査報告書』の「まとめ」では、「今後は、出土遺物の比較だけではなく、遺構の構造についてもより詳細な検討が行われるべきであろう」と述べている。それで大牧の構造について考察してみたい。

大牧の規模については、1916 年、農商務省の調査により 186.1 ヘクタールとなっている。牧の構成要素としては、後で示すように種子島の古い馬牧の場合、８つの要素がある。①牧の囲い（木柵、石垣、土堤、堀、山、川、岩壁、絶壁、小島）、②エサ場、③水飲み場、④台風、大雨、寒暑時の避難所（立場とも呼ぶ）、⑤牧人の住居、⑥牧の守護神（神木と石柱）、

⑦馬を捕獲する場所（馬追い場、オロ）、⑧牧を管理する「〇〇マキ」と称する一族名の「名残」などである。大牧の牧畜は、牛と考えられるので、⑦の馬捕り場と⑧の一族名の「名残」はない。

まず、①の囲いである。牧の北東側は標高 70 ㍍から 88 ㍍の断崖絶壁である。この絶壁は牛が逃亡しないよう、牧の囲いとしての機能を持っている。陸地側には原始林があったはずで、そこは木柵などで囲うことが出来る。そして、障害物のない平地には、石垣が積み上げられていたと考えられる。保良平安名崎の牧場（52 ヘクタール）を撮影した 1935（昭和 10）年の写真４がある。牧の入口の周辺に、石垣が張り巡らされている。このような石垣の一部が、本土復帰前まで大牧の南側に残されていたようである。牧を囲む石垣のほとんどが、道路工事に投入されている。このことは、地域住民の多くが記憶していることである。

次に、②のエサ場である。現在は開墾などで野草の種類が減少している。グスク期から中世にかけては、家畜のエサとなる野草は今以上に豊富だったと考えられる。仲間の調査によれば、宮古島の家畜の粗飼料は、50 種を数えている（仲間 2012）。牛馬が好んで食べる野草・ススキ、チガヤ、ハイキビ、ハマササゲ、ウマゴヤシ、アサガオなどは今でも豊富にある。干ばつなどで野草が枯れると、アダンやフクギ、カジュマルの葉も食したとの記録もある（佐々田 1922）が、宮古島では、今も昔も野草だけで牛馬の飼育は可能である。

③の水飲み場としては、吉野集落が 1957 年から簡易水道水源として使ったところの湧水で、びゅうがーがある。また、バラ海岸に流れる湧水もある。双方とも崖下にあって水量は豊富である。この湧水は、海に出入りする通路に面している。カームイ嶺には、プイキャー御嶽の近くに豊富な湧水があり、近年も農耕馬の飲み水として利用されていた。

④の立場は、原始林の中である。天然記念物に指定されている狩俣集落北方の「狩俣の植物群落」や宮原地区の「飛鳥御嶽の植物群落」が昔の原始林の形を残している（宮古島市の文化財 2011）。フクギやイヌマキ、カジュマル、アコウなどの大木もみられるから、台風時に牛が避難する安全な場所といえる。⑤牧人の居住地は、1987 年に調査した大牧遺跡の遺物包含層の場所と、牧の中に残されている御嶽附近だと思われる。⑥牧の守護神は、「まだま御嶽」にも祀られていたと思われる。「まだま（真玉）」は、狩俣の古謡「タービ」で祖先神といわれている。現在、航海安全の神として崇められている。カームイ嶺には、西側の丘陵地に牧中御嶽があり、東側の丘陵地にはプイキャー御嶽がある。これらの御嶽には、最初牧の神が祀られ、その後牧を管理した人たちの祖先神も祀られたと考える。牧が造営された当初、ここで牧を経営する人びとは、下地（2012）が指摘するように、保良元島の居住民や「婆羅公菅下の密牙古人」とつながりを持った人たちだったと考えられる。

１－３　牧中（砂川牧）

砂川牧といわれた場所は、大牧の中の１ヵ所である。城辺地区新城集落の北方に所在する牧中御嶽を拠点とする丘陵地で、標高は 92 ㍍である。牧中御嶽にはウルカマキのイビのほか天照大神、平良のツカサヤー神、池間のウパルズの神、野城御嶽の神、新城プイキャーの神の分神が祀られている（『平良市史』御嶽編）。東側には、標高 86ｍの丘陵地があり、友利牧といわれている。東側丘陵地にはブイキャー御嶽があり、祭神はウンキャヌスとしての性格も有し、人の運命、富と貧を授けるとされ、新城集落の家をそれぞれ訪れるという。『平良市史』御嶽編。ブイキャー御嶽の近くには豊富な湧水がある。

両丘陵地は牧中御嶽遺跡として調査され（大城編 1983）、採集遺物として野城式土器、輸入陶磁器（12～13 世紀頃）、骨製品（牛骨を活用した斧？）、石器などがある。東側丘陵地の北側面一部に城壁の一部と思われる石積み？が認められる（城辺町教委 1987）。

砂川牧の伝説については、稲村の『宮古島庶民史』に書き残されている。

> 伝説によると、うまの按司と小真良波按司は術くらべをした。うまの按司は砂川から狩俣までの道路をつくり、小真良波按司は東平安名岬までの石垣を積むことになったが、うまの按司が勝った。しかしそれは小真良波按司が石垣を積んだ上に更に狩俣村の城門を築いたため負けたのだという話がある。そして２人は夫婦になり、その子が金志川豊親見であるともいい、その子７歳の時に父小真良波按司を狩俣村にたずねたので、引き出物として子供の望によって、うぷか牛（親牝牛）を与えたところが、他の子牛も皆うぷか牛についてきたので、金志川は現新城村越に砂川牧場を仕立てて　牛を牧養したと称している。この砂川牧は最近まで砂川村がこれを使用していたそうで、明治の中頃までその所有権について砂川村と新城村の間に争いがあった。

この伝説のなかの幼い金志川は、砂川の上比屋に住む「うまの按司」の息子で、のちの金志川豊親見である。砂川牧の話は、城辺地区の人たちにも広く伝承されている。『城辺町史』第５巻民話編には、新城集落の上原弘進（大正２年生）の「クバラパーズの息子」という民話が掲載されている。また、福中集落の新城トシ（大正６年生）が「知恵息子と砂川牧」、友利集落の下地茂（明治 43 年生）が「友利牧の由来」という民話を載せている。民話のタイトルは違えど、話の内容はおおよそ似たものである。

城辺地区砂川集落では、現在（2018）も新城集落越の牧中（砂川牧）に出かけ、牧の内にある牧中御嶽で「マキ・ニガイ」という祭祀を執り行っている。祭祀は旧歴の４月と 11 月の２回である。砂川集落レベルの祭祀であり、神役は自治会の役員が務めている。祭祀当日の午前中、砂川自治会の会長、会計、班長（２）の４名が、牧中御嶽に出向き、御嶽のウルカマキのイビに線香を焚き、酒や食べ物などの供物を捧げ、牛馬の繁栄と健康安全を祈ってい

る。この「マキ・ニガイ」は、明らかに牧の神への祈願である。

砂川牧の伝説で、幼い金志川に牛を与えたという「クバラパーズ」とは一体どういう人だろうか。『宮古島記事仕次』によれば、飛鳥爺を滅ぼした石原城の恩千代按司の妻が、クバラパーズの妹となっている。『宮古島記事仕次』には、狩俣村の「小真良はひ豊親見」は、おそろしき呪詛（法術）の達者で、世の人これを恐れていると記されている。この「小真良はひ豊親見」は、神術をもって糸数按司を死に追いやっている。

『宮古嶋記事』によると、「こまらはひ」は津堅島の人で、妹とふたり宮古島に来た。最初は白川浜に住んでいたが、戦乱が多いため狩俣の遠見台の地に住居を構えたようである。狩俣部落の東門、中門、西門を構築し、部落周囲に石垣を築いたのはクバラパーズの実績であり、そのために「島の主」として祀られたと伝えられている。（写真１．２．３）

クバラパーズは、狩俣の古謡にも謳われている。「大城元のピャーシ」では、「くばらぱージ　とぅヨんしゅー（鳴響ん主）、崇べよう」と謳われ、「志立元のピャーシ」では「くばらぱギ　トヨんしょーョ　崇べよう」、「仲嶺元のピャーシ」では「くばらぱジ　とぅゆんしゅーゆ　なーぎり」と謳われ、「東山の祓い声」では「くばらぱキ　かんみょー　島の主の神よ」と謳われている。クバラパーズが構築した東門には、ニッジャ金殿という守護神が祀られている（外間・新里 1978）。

砂川牧は、幼ない金志川がクバラパーズから牛をもらってきて仕立てたとなっているが、クバラパーズが狩俣で牛を飼っていたことは、うかがえるだろうか。まず、クバラパーズが構築した東門に、ニッジャ金殿という住民と家畜の守護神が祀られていることが、謎解きの糸口となる。部落周囲に石垣を築いたのはクバラパーズの実績とされているが、この石垣は外敵からの防御するほどの強固なものではなく、牛が逃げ出さないような囲いではなかっただろうか。つまり石垣を張り巡らしたのは、牛を放牧するためであり、その牧の中に部落はあったと考えられる。平安から鎌倉時代以降、全国に牛馬の牧がつくられ、牧を管理する人たちが牧の中で部落をつくっていた事例は多い。鹿児島県中種子町歴史民俗資料館には、牛馬牧の中に部落を描いたイラストが展示してある（図４、28 頁）。牧中の部落民は血族関係者で構成され、○○マキ・一家（イッケー）と呼ばれている。

クバラパーズの時代に狩俣で牛が飼われていたことは、古謡の「八重山ウシメガ」タービに謳われている。「八重山ウシメガ」内容について、新里（2005）は次のように解釈している。「ウシメガ」は八重山で名高い女性であった。狩俣部落の祖先神「ティラの大按司鳴響みゃー」に懇望され、夫婦になった。その時、ウシメガは八重山から５頭の牛を持ち込んだ。３人の子供もでき、すっかり八重山のことも忘れてしまった頃、ウッツァ原で飼っていた牛を盗られてしまい、盗人と争いとなり、命を落としてしまった。その後、姑が３名の子供を

立派に育てたので、宮古が永久にある限り、ウシメガは子孫の神・祖先神であってほしいと、タービに称えられている（新里 2005）。

狩俣の古謡には、マキャ殿を称える歌詞が少なくない。「山のフシラズ（タービ）」と「前の家元のフサ」には「前の家大家の万座に　新降りのマキャ殿に」を謳われ、「ティラの大按司のタービ」と「西の家元のフサ」には「万座栄えをとって　マキャ殿栄えに栄えて」と謳われている。この「マキャ殿」について、外間・新里（1978）は、「神女がかぶる草冠は、ウプパーとキャーンという植物でつくるが、そのキャーンをくださる神をさすようである。」と述べている。しかし、この解釈は甚だ疑問である。外間・新里は「マイニャ元の夏穂祭りピャーシ（女）」に謳われている「まきゃどぅ　だき　わんな」を「マキャン〈植物名〉を抱く　わたし」と解釈している。同様に「東山の祓い声〈女〉」の「まきゃどぅ　だき　かんみょー」という歌詞を「マキャン〈植物名〉を抱く神よ」と解釈している。このマキャンはキャーン（和名：シイノキカズラ）と同一視できる。しかし、発音が似ているからと言って、「マキャ」も同義語とみなし、「マキャ殿」を草冠の神とするのは誤りだと考える。一般的に「殿」は、来訪神の接尾敬称辞である。草冠をつくる在来の植物の神であれば、水のヌシ（主）」同様に「マキャン主」と称するのが正解である。また、マキャ殿は「新降りしたり、栄えに栄えて」と謳われており、その形容は来訪神を表現していると考える。

では、狩俣の古謡で謳われている「マキャ」とは、どういう意味だろうか。沖縄本島北部に使われたマキョ（『琉球国由来記』）やマク（『国頭村史』）と同義語ではないだろうか。クバラパーズが構築した東門には、ニッジャ金殿という住民と家畜の守護神が祀られていること。石門と狩俣部落の周囲に石垣が張り巡らされていること。八重山のウシメガが５頭の牛を持ち込んだこと、クバラパーズが牛を若き金志川に与えたこと。これらをまとめてみると、マキャは明らかにマキ（牧）であり、マキャ殿は「牧の神」ではないかと考える。クバラパーズ時代の狩俣には、牧があったことが想定される。幼い金志川が、砂川牧を地元の砂川上比屋山ではなく、新城越に仕立てたのは、狩俣の牧に準じて海岸の絶壁も活用するためだったのではなかろうか。

２節．石垣で囲まれた城跡

２－１　高腰城跡と牧

高腰城跡は、比嘉集落北方の丘陵地（標高 108～113m）につくられている。「城主は高腰按司と称し、強力無双、武勇絶倫の人であったと伝えられ、また、農耕を奨励したり牛馬の牧養に力を入れ、治民の成績を大いに挙がった。大きさは東西 30 間（54m）、南北 23 間（41.4m）となっている『雍正旧記』（1727）。南西２面は断崖をなし、東、北の一部は広い田圃

に連なり、・・・恐らく宮古古城跡中で最も要害堅固になる城址というべきであろう」（稲村 1972）。「高腰と新腰のあやぐ」には、牛牧のことが謳われている。また、高腰御嶽には、牧畜を奨励した神として高腰按司が祀られている。

遺跡調査によれば、城跡の大きさは 2800 ㎡である。野面積みの石垣で囲われ、城門は南東に位置していた（写真５）。石垣の高さは不明だが、６～７尺ならマキの可能性が高い。出土物としては、宮古島産の野城式土器　中国産の青磁櫛描文皿、青磁劃花文碗、白磁玉縁碗ビロースクタイプ土器、徳之島産のカムイヤキ等である。これらから、遺跡の年代を推定すると 12 世紀後半から 13 世紀前半頃とみなされる（城辺町教育委員会 1989）。

この遺跡からは、哺乳類の遺骨としてイノシシやウシ、ウマ（馬）が出土している。出土数量表によると、ウシの部位骨が 89 点、ウシの遊離歯が 98 点、ウマ（馬）の遊離歯が 12 点となり、ウシの骨が比較的多い。宮古諸島における当該期のウマ（馬）の骨の出土例は、本グスクが初めてのようであると記してある。出土したウマ（馬）の歯を「C14 年代測定」したところ、「calAD 1,561～1,634」（16 世紀後半から 17 世紀前半）の暦年代値を得た（長濱 2012）。出土したウマの骨は、後から紛れ込んだもので、高腰城時代には馬は存在していなかったことになる。高腰出土のウシの骨については、「C14 年代測定」はまだおこなっていない。ただ、高腰城跡と同時代の遺跡である近隣の野城遺跡、カームイ嶺遺跡、保良元島遺跡からウシの骨が数多く出土していることから、高腰按司が飼っていた牛だと推定される。

高腰城では、どんな牛飼いをしたのだろうか。「高腰と新腰のあやぐ」の内容は、新腰按司の牧から牛が逃げて、高腰按司の田圃を食い荒らした。女按司の新腰は、高腰按司に対して損害賠償として牛百頭、あるいは酒甕百本受け取ってくれと頼むが、ことごとく拒否される。高腰按司の狙いは、嫌がる新越按司を自分の部下（妻）にすることにあった。この「あやぐ」では、新越按司の牧から牛が逃げ出して、新腰按司の悲劇が生じている。高腰城では、石垣の城壁で囲まれた中に牛を飼っていたため、牛の逃亡の恐れはない。従来の放し飼いの牧より、城内で囲って飼育した方が、より安全管理はできる。このことを「あやぐ」は示唆している。牛を放牧ではなく、城内で囲い飼いする技術が、13 世紀に導入されたことになる。

２－２　西銘城跡と牧

西銘城跡は宮原地域の北方、海岸沿いの丘陵地にある。高腰城跡より年代は新しく、14 世紀の遺跡とみられている（『宮古島市史』第一巻）。西銘城趾からは「褐釉陶器いわゆる南蛮陶器が圧倒的に多く、反して土器は極少である。もし西銘城が陶磁器に依拠していたとすれば、他に比してかなりの文化レベルをもっていたのではないだろうか」と下地（1983）は述べている。城跡の規模は 4500 ㎡で、石積みによって内郭（1500 ㎡）と外郭（3000 ㎡）に

分けられている（沖縄県教育委員会 1990）。

西銘城主は、はじめ炭焼太良と呼ばれていた。野崎村出身のモウシを嫁に迎えてから、頭角を現し、鍛冶屋として活躍した。『宮古島記事仕次』によれば、カマやヘラをつくって百姓に与え、村を繁栄させたので「嘉播の親」と呼ばれ、その後、西銘按司として称えられた人である。この西銘按司の長女は、目黒盛豊親見の母となり、次女は飛鳥爺を娘の婿に迎えている。西銘按司の３名の息子は親不孝者であったようだ。按司が年老いて目が不自由になると干潮の海に連れ出し、溺死させようとしたが、運良くフカ（鱶）に助けられた。西銘按司は牧で飼っている牛を、助けてくれた鱶に与えたといわれている（『宮古島記事仕次』）。西銘按司が牛を飼っていた牧を「タキャーラ・マキ」呼んでいる。位置は城跡近くとなっているが、西銘城跡の外郭部分（3000 ㎡）なのか、あるいはサガーニ背後地のサガーニ遺跡（1800 ㎡）なのか、今のところ定かでない。城跡の東方約 200ｍの位置に、ダーシガーという湧水があることから、外郭部分の可能性が高い（写真６）。

城跡の中には西銘御嶽がある。この御嶽で祭祀を行っている宮原北増原集落の人たちは、「牧タスキ・ネガイ」（マキダミともいう）を現在も執り行っている。旧歴４月頃甲午（きのえうま）のユーヌタミ、シツという祭祀に合わせて、牧ダスキ・ネガイは行われている。

西銘按司（嘉播の親）の孫娘はオモウという美女で、その婿になった人が飛鳥爺である。この飛鳥爺は、三代目西銘按司として勢力を広げ飛鳥城を築いた。また、西銘村、おわて村、かたて村、いこむ村、きやけ村の５ヵ村をつくりあげた。西銘村の西側に位置する石原城の城主・思千代按司は、自分の領地が盗られるのではないかと心配し、飛鳥爺を亡き者にしようと企んだ。刺客はウキミゾラと言う人である。飛鳥爺は白川浜の決闘で、ウキミゾラに謀殺された。飛鳥爺を射止めた彼には、報恩として屋籠牛５頭が与えられたようだ。『宮古島記事仕次』には、「屋籠牛とは、今の犂牛を屋の中にこめ置能飼立肥す候」と記されている。「犂牛を屋の中にこめ置き、肥育した牛」といっても、当時、牛耕のための犂（鋤）は存在しない。「こめ置きした屋」とは、畜舎ではなく、石垣で囲い込んだ屋敷や区画のことだと考えられる。石原城は石垣の城壁で囲まれ、その大きさは 30 間×17 間で、面積にして 1600 ㎡程度と見られている（吉村玄得　広報宮原 13 号）。この城壁の中で飼育した牛が「屋籠牛」だと考えられる。人がエサや水を与えて育てた牛だから、牧場で飼う牛より肥えていたはずである。

２－３　てまか城跡と牧

てまか城跡は、上野地区宮国の西隣の丘陵地にある。大きさは東西約 90ｍ、南北 80ｍ程で、7200 ㎡の面積に当たる。石垣で取り囲まれ、高さは６尺（180 ㎝）から７尺（210 ㎝）程であ

る。石垣は戦後の道路工事の材料に投入されている。入口は南方に向かっている（写真７）。牧の内部には、ヤマトガムギリウヌスを祭神とする御嶽と洞窟を利用した井戸がある。

稲村（1957）は、中央部にある小祠（拝所）の周辺から、高麗焼類似の陶磁器１個と南蛮焼１個を採集している。14 世紀頃の遺跡と見られている。「てかま城跡は丘陵の最高部になっているが、附近は平地であって、決して要害の地でない。唯昔時この附近は原始密林に覆われ、又島内各地から隔離された地方である。近隣の宮国でさえ此の城址の所在を知らないものが相当いる。一般に「てまか牧」として知られているから一時牧場として馬の放牧地に使用されたこともあろうが、周囲の石垣の址や井戸の設備等から見て、牧場として使用するために造られたとは思えないから、城址を一時牧場に使用したと見るのが穏当であろう」（稲村）。しかし、この城跡を一元的に見るべきではないと考える。最初の目的は、牧場として造って、牧が無くなってから跡地利用として作り替えた可能性をも考慮すべきである。

城址から南にむかって下り坂の小径が通っている。この道を下っていくと「あだん嶺」と称する「んなふか」行事の名所がある。この所を過ぎて更に南に行くと前記たい屋原の傍を通って深江端の入江にたっするようになっている。恐らく此処も日本人倭寇の隠棲した所であろうと、稲村（1957　1972）は述べている。

では、「てまか牧」に飼育された牧畜はなんだろうか。時期的に考えれば、牛が飼育されたことは間違いあるまい。ところが伝承や祭祀の「んなふか」には、馬が登場し大事な役割を果たしている。「んなふか神」が立派な馬に穀物の種を積んで、百姓に配ったり、また、百姓は牛馬を外に出さないで屋内に隠して置いたと伝承されている。現在、宮国集落では、ンナフカ祭祀の期間中、フナヤー（現在、海岸沿いの御嶽）には、海上からユー（富）を運んできた神々を歓待するための祭祀が行われている。フナヤー（船屋）・ニガイである。旧歴 11 月に４日３晩行われる。この祭祀の最後に、ヌーマピラス（競馬）の模倣儀礼が演じられてる（『宮古島市史』第二巻祭祀編）。このような伝承や祭祀の中に、色濃く残る「馬」について、今のところ当時の馬の存在を裏付ける遺物は、「てまか城跡」から見つかっていない。

２－４　久場嘉城跡

クバカ城跡は入江部落の西側入口にある。久場嘉按司の居城の跡で、大きさは 50m×60m で 3000 ㎡、門は南西に向かっている（『宮古島市の文化財』2011）。この城跡には中に井戸があり、拝所は南外側にある。また、野面の石積みがおおかた元の形で残されている。石垣の高さは６尺（180 ㎝）から７尺（210 ㎝）、石積みを屈曲させたり複雑な出入り口とはならない（写真８）。平地につくられた城で要害とはいえない。その由来については『雍正旧記』

（1727）に、城主クバカ按司は強力無双の人であったと記されている。時期的には 14 世紀頃と見られている（『宮古島市史』第一巻）。この城跡は、「クバカ牧」という説もある。他の城跡に比べて、積み上げられた石垣は強固である。馬牧だった可能性が窺われる。

２－５　城跡と牧の考察

以上４つの城跡をみてきた。先ず第一に、なぜ城跡と言われたのか考えて見たい。
それは、各城跡の由来が『宮古島旧記』などに記されていること。そして、記録の中には、城の主がいること（てまかは倭寇？）。そして、遺構として石垣の囲いが残されていること。さらに、近くに御嶽があること。城跡からは遺物が見つかっていること。これらの文献、考古資料により城跡とされたと思われる。伝承では、城主が強力無双、武勇絶倫と強調されており、お城の色彩を濃くしている。

第二に、城と伝承されているが、遺構は石垣だけである。どんな建築物が建っていたのか不明である。石垣の積まれた場所は、ほとんど平地である。宮古島で要害堅固な城といわれている高腰城跡も、南西２面の地形が断崖をなしているからで、東、北の一部は広い田畑に連なっている。地形が険しく防備が固く、容易に敵に破れない城とは言い難い。久場嘉城跡の城壁となっている野面の石積みは、おおかた元の形で残され、その石垣の高さは６尺（180 ㎝から７尺（210 ㎝）である。石積みを屈曲させたり、複雑な出入り口とはならない。稲村（1972）も「久場嘉城跡は、平地につくられた城で、要害といえるようなものではない」と率直に述べている。

第三に、各城跡の面積は、約３千㎡から７千㎡である。全体が石垣で囲まれている。石垣の高さは６尺から７尺程度である。周辺はおおかた平地になっており、外敵からの進撃を防御する施設としては不十分である。この石垣の高さは、牛を囲い込み、逃亡を防ぐには適当な高さである。高腰按司や西銘按司など城主が、牛を飼っていたと伝承されていることから、牛を囲い込んだ牧ということになる。中でも久場嘉城跡は比較的強固な石垣が積まれていることから、牛だけでなく馬も、飼育されていた可能性が考えられる。

第四に、牧の中であっても、人は住むことは出来る。牧の中に住宅をつくり、牛馬が立ち入らないように宅地の周りを木柵で区切って住み着いている事例は、種子島の古い牧などにみられる（鹿児島県中種子町民俗歴史資料館所蔵の「牧のイラスト」図４、70 頁）。また長野県木曽開田村や北上山地や中国山地、長崎県対馬など牛馬生産の核心地では、よく見られたものである（市川 1981）。

第五に、牧の語源である。宮古島の牧は、最初九州方面からの渡来人によってつくられたと思われるので、大和（本土）の資料をめくってみた。平安時代中期につくられた辞書に『和

名類聚鈔』20 巻がある。その中の第１巻「原野類第６」（コマ番号 19）に牧の語源が記してある。「牧　尚書云萊夷爲牧音目孔安國云萊夷地名可以放牧無萬岐」となっている（国立国会図書館デジタルコレクション）。この中の「牧音目と地名（和名）放牧無萬岐」は、「牧の音はモク、放牧の和名はムマキ」であると解釈され、「ムマキは即ち馬城の義にて、今、マキと云うは、その約称なり」と注解するのも適切であると述べている（高橋 1995）。そして、キ＝城＝柵は、関のキと同じく「塞く」の意味で、四方を囲って、内外を閉塞する義。従って「馬城（まき）」は、馬を内に囲い、外から防ぎ、保養する場の義とすべきであるとし、牧ははじめから馬牧として受容されたために、日本語としては馬城（マキ）とされたのであると述べている（高橋 1995）。なお、上古の古典では、牧は牛を養い、園が馬を養うとあることを紹介し、ただし、一般には、牛馬牧いずれも牧養（マキ）というに至ったことを伝えている。（邨岡良弼 1902）

こうした牧の語源からすれば、牛馬牧をマキ＝馬城と称してきたが、牛馬がいなくなり、地域の豪族だけが住むようになったところを、ジョウ＝グスク＝城と呼ぶようになったのではなかろうか。今、残されている城跡は、マキ（馬城）としてつくられ、その跡地利用として豪族が住み着いた場所となり、そのため、城（グスク・ジョウ）と呼ばれた可能性が考えられる。

３節．小島を使った牧

３－１　伊良部下地島牧

伊良部下地島牧の由来について『宮古嶋記事』には次のように記してある。「伊良部下地と申所へ牛馬牧圍置候由来の事。右中古伊良部村伊安姓國仲与人舩作事に八重山嶋罷渡牛牡牝弐疋買渡右牧相圍い飼立為申由候爾今其伊良部國仲佐和田３ヶ村百姓中牛馬牧ニ相成牛馬飼にて永々重宝相成候事」。注解すれば、中古伊良部村伊安姓國仲与人の船作事が八重山に渡り、牛牡牝２疋を買い求めて帰り、右島に牧囲いをして飼い建てたと伝えがあり、其後、伊良部、國仲、佐和田３ヶ村の百姓が牛馬牧として使用したものということになる。

伊安（イヤント）氏の人で、伊良部村國仲与人を務めたのは「６世・方里」（隆慶期）と「７世・方清」（隆慶期）の二人である。二人が國仲与人を務めたと思われる年代は、隆慶 1567～1572 年から万暦 1573～1620 年の間になる。薩摩侵攻の 1609 年前後の時期にあたる。下地島の牧場は、274 ヘクタール（『馬政局事業時報』1922（大正 11）年と記録されているが、首里王府の直営の牛馬牧として運営されたときには島全体（954 ヘクタール）が牧として使われたと思われる。

島全体が牧場として使える地形的な有利性と豊富な野草の茂る平坦な原野、毒蛇の生息し

ない自然環境にある下地島の牧を、首里王府は馬産政策上重視したと思われる。その理由として、宮古島に在番を設置（1629 年）して間もなく、首里王府の馬産政策の責任者・野國親雲上が宮古在番として派遣されているからである。野國親雲上・宗保は、久米島の仲黒馬や首里の仲田青毛を調教して名馬に育て上げ、薩摩の太守光久公に献上した人である（『球陽』1745）。野國親雲上は 1634 年と 1644 年の江戸立ちの時、琉球使節団の別当職（江戸献上馬の担当）として活躍している（長濱 2013）。記録では、野国親雲上が宮古島の在番任期中に、宮古馬とどう係わったかは明らかではない。しかし、彼が江戸献上馬の担当役人であったことからすれば、宮古島に献上馬を生産するための条件整備をしたことがうかがえる。首里王府は 1651 年に野國親雲上の後任に、馬氏家の高江洲親雲上を充てている。また、1673 年に宮古在番として派遣された高江洲親雲上、岸本筑登之親雲上、喜屋武筑登之親雲上の３名は、馬氏の人である。馬氏は馬産政策に係わっている家柄と考えられ、３名の同時派遣は特徴的な対応といえるものだ（長濱 2013）。

宮古島に対して、首里王府が本格的な馬産政策を講じたのは、1678 年に公布された『恩納親方規模帳』からだと思われる。ところが、この記録は残念ながら残っていない。その後に公布された『与世山親方宮古島規模帳』（1767）は『恩納親方規模帳』を基にしたものといわれている（島尻 1980）。『与世山親方規模帳』には「恩納親方定めた通り」とか、「前々からいろいろ申し渡してある」、「前々から禁止してある」などと記されている。

伊良部下地島の牧について、『与世山親方規模帳」に定められた事項を取り上げてみよう。

138 条　宮古島生まれの馬は、いつも御用または毎年諸士のあつらえがある。とりわけ繁殖させなければならないので、伊良部下地の馬牧の番人等は頭の下に設けてある。それで、油断なく保護に念を入れ年に２度ずつ担当役人と筆者は相談して蔵元へその経過を報告し、「馬帳」２冊を作成して１冊は蔵元で保管し、１冊は担当役人が保管する（馬の）生死の取り扱いは、在番と頭の印を申請する決まりであることを申し渡す。

148 条　伊良部下地の馬牧は敷地よく馬繁殖し、御用馬を出す重要な牧である。ところが、耕作のためアダン山を伐採したので、木陰もなく風雨寒暑の時、馬が休む所もなく、さしあたっては（馬は）繁殖しないようなので、所々にアダンあるいは成長しやすい樹木を植え付けさせ、また、水呑み所も２～３か所場所を検討して掘り、以前のように十分馬を繁殖させるよう指図に念を入れること。

附　在番や頭、その他の役人たちまで、牧から雌馬所望の申し出を許可すれば、牧場の繁殖のためにはならない。それで、今後は禁止する。ただし、父馬母馬の体調のすぐれないものは、よく育ちを検討して時々入れ替え致すべきなり。

この規定は、下地島牧に対する首里王府の管理規定である。この特徴は、まず第１に、牧

場の設置目的を明確にしている。その目的とは「献上馬、御用馬生産」である。第２は管理責任者を、現地村の役人ではなく、蔵元の在番と頭と定めている。しかも宮古島の役人のトップである頭であっても、牧場の馬を自由に取り扱うことを禁止している。ここに下地島の牧が、首里王府直営の牧であることが示されている。第３の特徴は、牧の番人も、頭の下に置き、牧馬一頭一頭の性別、年齢、毛色などを記載した馬籍簿２冊を作成し、一冊は蔵元、あと一冊は担当役人が保管している。牧馬に関する情報交換と飼育管理を徹底していたのである。第４に、暴風雨、寒暑時に馬が隠れる場所「立場」の確保や水飲み場など、牧の管理を徹底していることである。

こうした牧の管理方式は、平安・鎌倉時代の勅旨牧や御牧によく似ている。段木一行（1995）は「延喜式の牧の立地条件を調べると、海に囲まれた島、川の中洲や張り出した湾曲部、半島上の地形に位置するものが多く、・・・耕地と牧を分離する土塁や柵や堀の構築に手間が省けるからである」と述べている。こうした情報を首里王府の別当が、江戸幕府滞在中に得て、下地島の牧を王府直営牧場に仕立てたのではなかろうか。

段木一行（1995）の『馬の文化叢書』「古代末期東国の馬政」24－43 の論文で、『延喜式』や『厩牧令』によれば、牧の管理体制は、別当をトップに牧長－牧帳－牧子－飼丁となっている。別当職とは首里王府の場合、江戸立ちで献上馬を幕府に届ける高官であるとともに、宮古島に来島して「献上馬・御用馬を御目利き」する役人でもある。この別当が、牧の管理の最高責任者だったと考えられる。牧長は宮古在番官で牧帳は頭があたり、下地島の牧で牧場の世話をする番人が、牧子（村役人）と飼丁（百姓）だったと考えられる。「勅旨牧」（朝廷の牧）からは献上馬をだしているが、下地島の牧からも同様、献上馬をだしている。『厩牧令』によれば「毎年９月、国司立ち会いのもとに野馬追を行い、２歳になった駒に焼き印を押し、一々の馬の毛並みの色を書きとめた報告書（馬帳）を２通作り、国と太政官に提出させる。」と記されている。また、牧で生産された「優良馬」は貢馬（軍馬、駅馬、伝馬）にあてている。宮古島の場合、献上馬の選抜は首里王府から派遣された別当が行っている。『宮古島在番記』には、1713 年「江戸献上の馬御目利きとして御下島、真喜屋親雲上」、1746 年「御献上の御馬目利きとして御下島なされた。真喜屋里之子親雲上」、1838 年「大和への御献上馬目利きのために下島、別当・真喜屋親雲上」と記されている。

なお、宮古島の場合、献上馬の選抜は牧馬だけではない。首里王府は 1699 年、宮古島の平良下里に馬場を作っている。与那覇湾も内浜馬場として使っている。これは宮古島各地から優良馬を集め、献上馬を選抜したことを意味している。『与世山親方宮古島規模帳』には「百姓は御用馬に使われないように、馬に傷をつける者がいたという。今後はきびしく取り締まりを申し渡し、違反する者がおれば、本人はもちろん、曖役人にも処罰を申しつけるべき事」

と規定されている。

明和の大津波（1771）で、宮古島は大きな被害を受けた。住民が 2548 名犠牲となり、牛馬の斃死は 741 頭である。伊良部島と下地島で被害の大きかったところは、下地島、伊良部村、仲地村、佐和田村である（球陽）。その中で下地島には、津波で巨大石が打ち上げられ、津波の猛威が残されている。その後、下地島の牧は復興されるようになるが、津波で打ち上げられた巨大な石を、馬や牛の見張り台として使っている。現在残っている下地島の巨石は、「ヌーマミージー」（牧馬を見張る台岩）と呼ばれている。ウシミージー（牧牛を見張る台岩）は空港建設時に取り除かれた。

東恩納寛淳は「南東風土記」で「馬は明との交通に最初から重要貢物になっている。これも主として先島の産である」と述べ、宮古馬も明国に贈られたという見解を示している。この真偽のほどは、どうだろうか。首里王府が重視した下地島の牧は、献上馬としての宮古馬の動向を知る上で貴重である。まず下地島の牧がつくられたのは、伊良部村伊安姓國仲与人の頃と云うから、1609 年前後である。最初は牛牧として管理されている。宮古島に首里王府の施策が強化されたのは、宮古在番が設置された 1629 年頃からだと思われる。馬産政策は野國親雲上が宮古在番官として 1650 年に派遣されてからで、恩納親方規模帳（1678 年）が公布された頃、下地島の牧は献上馬生産を目的とした牧として重視されたのではなかろうか。中山（首里）王府から明・清国への貢馬は、相手国の通知で 1680 年をもって終了している。したがって、宮古馬が明国に贈られたかどうかは、極めて微妙な時期である。一方、江戸立ちは、1634 年に始まり 1850 年までの間に 18 回行われ、慶賀使の時には江戸幕府に献上馬が贈られている。1713 年から 1838 年にかけて、首里王府の別当職・真喜屋親雲上が献上馬選抜のため宮古島にたびたび来島している（『宮古在番記』）。こうした動きからすれば、宮古馬は、明や清国への貢馬と云うより、江戸献上馬として重宝がられたと言える。頭数からすれば献上馬は限られているので、首里王府の役人たちが使う御用馬や、中国から来島する冊封使の送迎用として使われたと考えられる。

４節．沖縄北部のマキ

４－１　北山王と貢馬

『明実録』によって、北山王が明の皇帝に献上した貢馬を調べてみた。まず貢馬の開始時期である。中山王察度の 1374 年に対し、北山王は 1388 年と 14 年も遅れている。しかし、南山とは１年の遅れである。進貢馬回数は中山の察度王が 27 回で、南山王は 19 回に対し、北山王は 10 回となっている。北山王は馬の進貢期間 1388～1415 年の間に、怕尼芝から珉、そして攀安知へと交代している。北山王の貢馬数は、進貢 10 回の内、２回分の 28 頭は明らか

であるが、残り８回分はわからない。当時、１隻当たりの貢馬数は 20 頭と推定されるので、推計値は 160 頭である。実数と合わせると、北山王の明への進貢馬は、27 年間で 188 頭となる（長濱 2014）。単純計算すると、北山王は１年あたり７頭の献上馬を確保するとともに、それに倍する馬を北山城の役人たちの御用馬として調達したと考えられる。今帰仁城内の大隅（うーしみ）はかつて「城兵達の騎兵訓練の場」であったと伝承されており、ここから大量の馬骨も発見されている（今帰仁村役場ホームページ「今帰仁城跡」）。

1385 年に明の皇帝は、王権を認めるため金銀印鑑を北山王に贈っている（『明実録』）。南山王への印鑑下賜は北山王と同年で、中山王とは２年遅れである。

明国は琉球に対し 1385 年、大型海船（進貢船）を無償提供している。『明実録』には「中山王察度、山南王承察度に海舟各１を賜う」と記録されており、北山王の名前はない。北山王に海船を提供しなかったのは、すでに北山王は、海船を持っていたからではないだろうか。今帰仁城跡からは、ビロースクタイプや今帰仁タイプの中国陶磁器が出土しており、明との朝貢貿易以前に、中国との交流があったことが明らかになっている。つまり北山は大型海船を持っていたことが窺われるのである。先に触れたように、北山王の明への貢馬は 10 回である。その内７回は、進貢期日が中山と同日になっている。つまり、北山王の朝貢の使者は、中山王の使者とともに、貢馬を皇帝に贈っている。これは北山の船が、中山の船と船団を組んで進貢したと理解することができる。

三山時代の貢馬は、中山王察度の 677 頭（推定値も含む）、中山王の 336 頭（推定値含む）であり、比較して北山王がとても少ない（長濱 2014）。山岳地の多い北山より、平坦地の多い中山と南山が、馬の生産に適していたことは疑いもない。北山王が３名も交代したことは、政権の不安定さを窺わせるが、いずれの王も、貢馬を増やすことで、政権基盤を強化したい意向だったと考える。

４－２　北山王と馬の飼育

では北山王が、貢馬や御用馬・兵馬をどこから調達したのか、どこが馬の生産地であったのか調べてみた。古い時代に馬が飼われていたという証言は、『大宜味村史』や『国頭村史』で見られる。三山時代まで遡れるかどうかは、検討の余地があるが、少なくとも近世以前であることは間違いあるまい。

『大宜味村史』（1979）には、「古老の伝えるところによれば、大宜味間切ではかつて馬の飼育が盛んであった時代があり、塩屋、大宜味、喜如嘉などには馬場が残っている。山林取締まりが厳しくなった後、山林荒廃のもとになるとのことで、馬の飼育は禁止され、用材薪炭の運搬はもっぱら人力に頼ることになったという」と記されている。『国頭村史』(2016)

には「王府時代に国頭間切と大宜味間切は、馬の飼育禁止地域とされていたこともあって、馬はほとんど飼育されていなかった。禁止されていた時期は不明であるが、おそらく山林保護につとめた蔡温時代で、馬による林産物の多量搬出は、山の荒廃を招くからだと考えられる。辺土名西平に馬追い（馬場）が存在していたことから、馬の飼育に適しないところではなかったであろう」（国頭村制施行百周年記念誌　2016）

蔡温の山林保護政策とは、首里王府の政策である。その中で、杣山に牛馬を放牧することを禁止する「お達し」が出された。大宜味間切や国頭間切で、牛馬が山林で飼われていたことの裏付けを、首里王府の文書で確認出来る。それは『山奉行所規模帳』で、公布されたのは 1737 年である。その第 17 項目には「土手内牛馬羊放候者科銭弐拾貫文申付拾貫文は披露申出候者へ相渡拾貫文は山仕立科に可申付事」と記されてる。口語訳文は「土手（土塚）内の山に牛、馬、山羊などを放し飼いしている者は、罰金 20 貫文を言い渡し、10 貫文は見つけ出した者に渡し、残りの 10 貫文は山の造林費に充てること。」（仲間 2017）。

『大宜味村史』や『国頭村史』、それに首里王府の『山奉行所規模帳』から明らかなことは、1737 年以前に大宜味間切や国頭間切で、山林内を含めて馬が飼育されていたということである。

４－３　マキョ・マキという言葉

マキョ、マキ名が、国頭村ではマクと呼ばれている。国頭村役場 2016『国頭村史』「くんじゃん」から各集落につけられたマキ（マク）名をとりあげてみた。

国頭村の村落とマク名　　国頭村役場 2016『国頭村史』

村落名	マク（マキ）名	村落名	マク（マキ）名
浜	寄り上げマク	謝識	ちーいるさかるマク
半地	1946（昭和20）年設立	佐手	ぼう、こうぼうマク
比地	まつがまマク	辺野喜	ちゃんちゃんのくいじマク
鏡地	1925（大正15）年設立	宇嘉	にしむいにしだけマク
奥間	カニマンマク	宜名真	1939（昭和14）年設立
桃原	カニマン小マク	辺戸	あしもりマク
辺土名	いちぶくマク	奥	みやぎ森イビすでるマク
宇良	すうとくマク	楚洲	すいまちがねマク　1736年村立
伊地	あしみなマク	安田	あだかマク

与那	谷川のよりあげマク	安波	おーじマク

マキョという言葉について、伊波（1940）は「マキウ、マチウ、マチュウなどといふ語が、地名の中にある。久志間切慶佐次村・ヨリアゲマキウ獄、今帰仁間切岸本村・ヨリアゲマチウの御イベ等々・・・これらのマキウ、マチウ、マチョウは、いずれもマキョの転で、それには血族部落の義がある。マキョは神歌および祝詞に多く出ている語で、稀にマキという語も出ている」（伊波「琉球国由来記解説」）と述べている。

こうしたマキョ、マキ、マクという言葉は沖縄本島北部だけに残され、他の地域では死語になっているようである。

４－４　マキョ（マキ）の各論説

マキョ、マキ、マクとは何を意味した言葉なのか。いくつかの論説があるので取り上げてみたい。結論から言えば大きく分けて２つある。１つはマキョは血族・祭祀集団という説。伊波普猷、仲松弥秀、稲村賢敷などの論説である。２つめはマキョはマキで、牧を管理していた血族集団というもので、大林太良、吉成直樹、大山彦一の論説である。

（１）伊波（1940）は、マキョの語源は多分「真子」で、古くは氏族、もしくは血統の義に用いられたらしく、夙に祖神を同じくする血族団体の居住する地域の義に転じて、現在に至っていると述べている。国頭郡大宜味村あたりでは、今は祭祀の時に限って、あの人は自分のマクではないと、排他的なことを云っている。この語は、北沖縄以外の方言では、とうに死語になっている。平凡社の『大辞典』について、マキの条を見る。マキの第一義は、族・血統である。青森県・岩手県・・・などで用いられている。マキの第二義は、村の意である。新潟県、岐阜県・・・などで用いられている。すると、マキョは共通祖語の南島に遺ったものに違いない。海部の南島に移住するや、まず入江や港湾などに居を占めて、マキョを形成し、漁撈に従事して、海神を祭ったであろうから、この「寄上げ獄」を中心として形成された 50 近くのマキョは、南島に於ける原始村落を研究するには、見逃すべからざる資料であると云わなければならない。マキョと言う古琉球語は、共通の血統を誇り、且つ一定の社会的及び宗教的制度によって、特殊の共同体に結合された血族団体に対して用いられたから、アマミ族は南島に移住した時、多分、氏族を通り越して、共産主義的親族群が家長的世帯共同体に進んだような気もするが、その発生とか、性質という事については、全太古史を包む大なる暗黒のために、何とも確信することは出来ない（伊波、琉球国由来記解説）。

（２）仲松（1975）は、東北日本には、マキという語があり、マキ名をもっている数個の村落もある。マキとは、「同一血縁団体、或いはその部落名」とされている。沖縄には、たとえば大宜味村塩屋村落を指してユアギマク（寄上マク）のマキ名がある如く、通常の村落名の外にマキ名を持っている村落が現在相当に残っている。この地域ではマキとはいわずに、マクと称している。伊波は「同一血族集団とその村落名」と定義づけているが、国頭村比地村落には、２つの系統の御嶽があり、２血縁集団から形成されていると見られるものがありながら、マキ名は唯一マツガママクとなっている。東北地方のマキと同じ「同一血族集団とその村落名」には不安が伴う。「同一御嶽の氏子集団と、その村落」とした方が良いと思っていると述べている（仲松 1975『神と村』）。仲松は「牧場でないマキ名なるものが、古代から琉球列島にあった」とし、マキは牧場とは関係ないとしている。

次は、仲松弥秀先生退官祈念講演 1975 年 11 月「沖縄のマキョ村落」のレジュメである（南島地名研究センター編 2005）。この講演で、奄美大島にマキョという言葉が存在したことを報告している。

①マキョの呼称と村ノロの発生は、尚清・尚元王のころ
②領域内からの物資確保の支配体制
③「マキョ」名は、部落に対する公称名であった
④「殿」「神アサギ」分布と一致
⑤「古代社会時代」にマキョは発生した
⑥マキョとは祖霊神を１つにしている集団と、その部落
⑦近代に発生したマキョもある

（３）稲村（1968）は、マキョは「真人（マキウ）」、「まひと」とも称し、「同一血統の出身者」と捉えている。沖縄の古代部落がマキョであるとし、沖縄本島各地のマキョを踏査し、６年かがりの調査をしている。稲村の『沖縄古代部落マキョの研究』については、比嘉政夫・高良倉吉（1977）が解説しているので、その一部を引用する。稲村がやや無造作に述べているマキョ像を整理・要約すると、①まずマキョとは「血縁で構成された単数か複数の小規模共同体」であり、高地性集落をなし、その結合原理は母権性に基礎をおく。②この共同体において共同労働と共同祭祀が盛んであり、③その経済形態は狩猟・漁労を主体とする採集経済であった。④こうした原始段階にあるマキョ社会に、「鎌倉時代になって日本の政権を握るようになった日本の武士団」の「海外発展」の波が押し寄せ、マキョ社会は大きく変貌しはじめる。⑤変化の最も大きい点は、鍛冶の伝来とその技術によって製作される利器の利用による農業の開始、農耕社会への移行であり、⑥その結果、たとえば鍛冶技術者など

がマキョ内部で有力者へ上昇し、⑦一方においてマキョが農耕に有利な低地へと移動する。

ところで稲村（1968）は、国頭村辺戸名の「いちぶくマク」で大事な指摘をしている。「彼等はどうして此の沃野と川流を利用して彼等の生活を築くことを考えないで、四面断崖と高峯に依って隔絶された狭隘なる丘陵上に彼等の生活の拠点を定め、不自由なるマキョの生活を長く持ち続けたのであろうか。家畜の飼育という自然の恩恵を利用した生産だけが、この険阻なる丘陵上に居住していた彼等に許された生活の全部であったのではなかろうか」。

以上のように、伊波は「同一血縁団体、或いはその部落名」と定義づけており、仲松は「同一御嶽の氏子集団と、その村落」、稲村は「血縁で構成された単数か複数の小規模共同体、高地性集落、採集経済」と定義づけている。

次は、沖縄のマキョ・マキは、牧と捉えている大林太良と吉成直樹の論説である。

大林太良（1995）は、『北の神々　南の英雄』で、マキョ（マキ）は「祭祀集団とその部落」だけを指すのではなく、その人たちの生業が牧だったことを意味していると述べている。「マキと似た言葉として、沖縄にはマキョという言葉がある。それは祭祀共同体を指している。これも、もともとは同族的な集団であっただろうと沖縄の研究者は考えている。沖縄の場合は、中国の明の時代、つまり日本列島の室町時代には、明の属国のような性格をもっていたわけで、明に出す馬もたくさん飼っていた。ですから牧がたくさんあった時代に、マキョという言葉がでてきたのではないかと考えている。祭祀共同体というのは、あるいは同族かもしれませんが、牧を経営している単位がなければならない。それが、牧がなくなっても、言葉として残っていくことが、可能性として考えられる」（大林 1995）。

大林は、同族をマキという言葉であらわしている地域を調査している。その地域は特徴的で、東北地方、甲州や信濃、関東の西部など平安時代以降に勅旨牧とか御牧が盛んだったところが、分布地域になっていることを突き止めている。したがって、牧場の名残がマキという名称で、同族名や部落名に使われていることを明らかにしたのである。そのため沖縄本島の北部に残されたマキョの言葉から、昔、牧が存在していた可能性が高いと述べているのである。

吉成直樹（2015）は、『琉球史を問い直す』で、明国に貢馬を贈っていた琉球に、多数の馬が存在したことを説明するには、14 世紀代の沖縄で馬を飼育する「牧」が拡大していたことを考えなければならないと述べ、大林の論説を紹介している。また、仲松が指摘した国頭村比地で、２血縁集団から形成されているにもかかわらず、マキ名が「マツガママク」の１つしかないことについて触れて、「複数の血縁集団が併合されたとしても、御嶽は複数存在

するが、それがひとつの牧の経営単位なるとマキ名はひとつだけになると思われる」と述べている。

筆者は昨年（2018）３月、鹿児島県種子島の牧とマキを調査した。戦後の農地改革で共有地であった牧は、個人有地化されたため無くなった。ところが、牧を経営していた一族、一家（イッケ、ケナーとも云う）の人たちは、例えば「松下マキ」のように、氏名をマキに冠している。松下家は戦前、牧を経営していた家元である。マキモトと呼ばれていた松下家の長男夫婦と、母方の従兄弟に当たる濱島さんご夫婦にお会いした。ご両家の仲の良さが、直ぐ伝わってきた。この方々は、松下マキの者である。マキを管理していた一族だけでなく、住んでいた地域もマキをつけて呼ばれていた。「人馬一体の感をもって、牧をあつかっていた親族の人々が、他に対して自らの親族をマキと呼び、又呼ばれるにいたっている」、「種子島では、マキは牧であるとともに、牧を基盤とする血縁共同体である」、「牧を共有する血縁集団」である（大山 1952 鹿児島大学文科報告第１号）。種子島では戦前、牧を経営した血族集団とあわせ、その地域にたいしても、「〇〇マキ」と呼び、牧の名残が今なお残されていた。

４－５　国頭村比地のマキ（マク）

マキョが「血縁共同体で祭祀集団」等という説と、マキは牧であり、牧の名残が一族や地域に「マキ」として残されているとの論説、そして種子島の事例を見てきた。

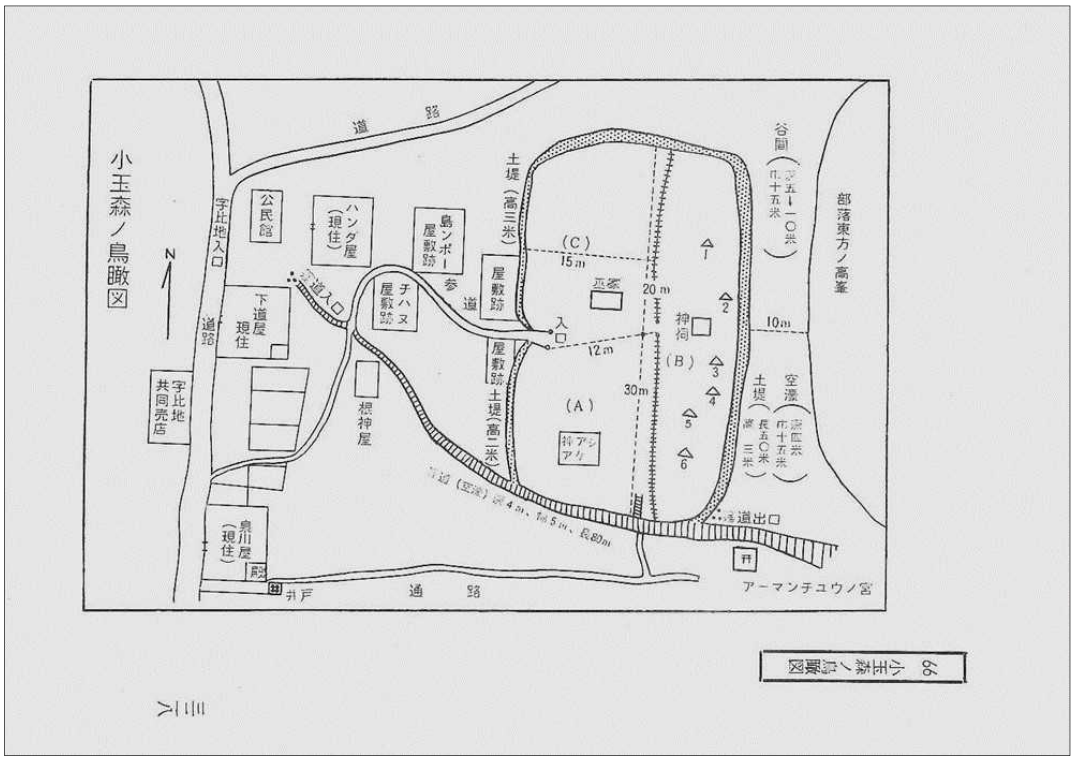
次は、具体的なマキの事例として、国頭村比地の「まつがまマク（マキ）」を取り上げてみたい。ここは小玉森と呼ばれ、部落発祥の地として崇められたところである。また。1991 年に「比地小玉森の植物群落」として、沖縄県の天然記念物にも指定されている。

これまでに「まつがまマク（小玉森）」は、三者による調査がされている。この調査では地図も作成されており、とても貴重である。小玉森など古い部落跡とみられているマク（マキ）は、丘陵地や山腹・山地にあり、雑木などで覆われているため、遺構の調査は現在、容易ではない。

稲村は、今から 56 年前の 1963 年に調査をし、「小玉森の鳥瞰図」を描いている。その図は『沖縄の古代部落マキョの研究』（稲村 1977）に掲載されている。次に當眞嗣一の調査である。当間は 22 年前の 1997 年に「小玉森の縄張図」を作成し、「いわゆる土より成るグスクについてー沖縄本島北部のグスクを中心にー」を『沖縄県立博物館紀要』第 23 号に掲載している。その次は、国頭村教育委員会の調査である。2013 年に小玉森の神アシャギの葺き替え工事とともに詳細な地形測量を行い、報告書にまとめてある。また、2016 年には小玉森の埋蔵文化財を試掘調査し、その結果を「鏡地配水池建設工事（仮称）に伴う試掘調査報告書」

にまとめている。

① 図１、稲村の小玉森「鳥瞰図」

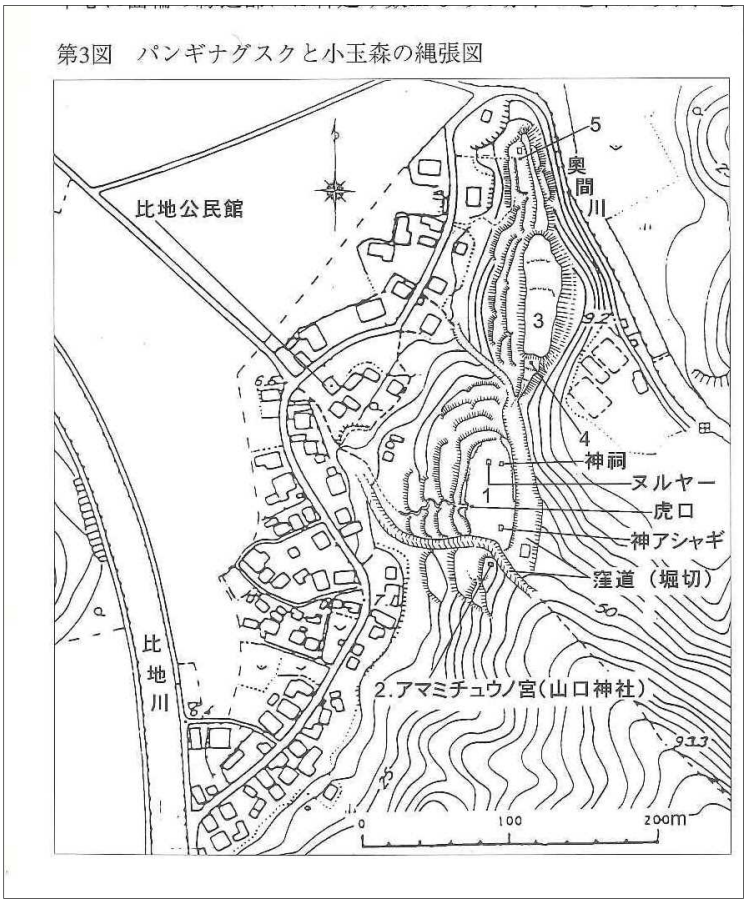


資料：稲村賢敷 1977『沖縄の古代部落マキョの研究』328 頁

稲村は小玉森の平場を３つの領域に区分し、 神アサギ領域（A）、拝所領域（B）、ヌル屋領域（C）に分けている。拝所領域（B）を拠点に位置づけて、一門が拝所としているアカギの神木や火の神を祀った神祠の置かれた場所を、風葬墓の跡と断定している。しかし、それを裏付けるものは何も示していない。平場周辺を囲む、高さ３ｍの土堤は見逃せない遺構である。土堤の一部が２ｍとなっているが、元々は３ｍだったと思われる。小玉森の植物群落は、1991 年に県の天然記念物に指定されている。アカギの大木はじめ、フクギ、タブノキ、クロヨナノキなどの大木がうっそうと茂り、その影響で土堤がほぼ原型を保っていたと考えられる。土堤の一部が２ｍになっていたのは、大木の一部が枯れて隙間が生じたため、風雨の影響を受けて低くなったと考えられる。筆者が 2017 年 10 月に視察したときは、土堤の高さは１ｍ以下と低くなっていた。稲村が 1963 年に計測した土堤の高さ３ｍは、遺構の内容を知る上で、とても意味のある数字である。

堀切の遺構を、窪道と解釈すると誤解を生じることになる。神の道であるとか、血族の違う集団を区切りのための分離帯とみなすことは、堀切を作った本来の目的を見失うことにつながりかねない。土堤や堀切の存在理由を、合理的に説明するとともに、それとの関連で拝所や祭祀は説明されるべきではないだろうか。要するに、聖域があるのは何のためなのか、土堤と堀切が構築する「施設」の機能との関連で、説明されなければならないと思う。

② 図２　當眞の小玉森「縄張図」



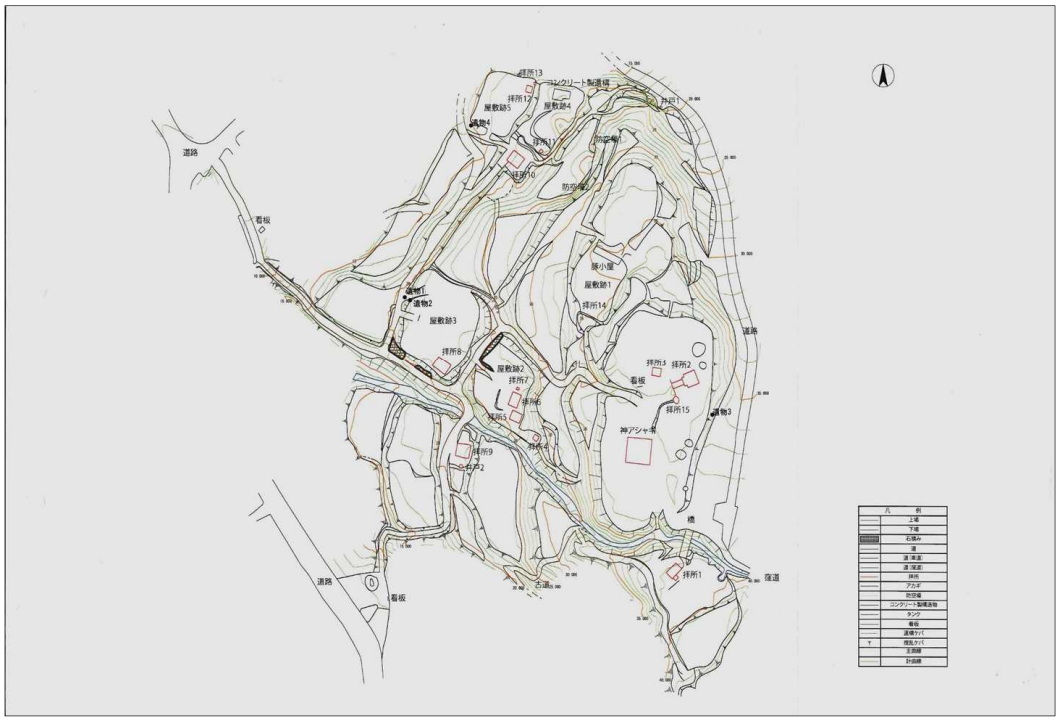
資料：當眞嗣一 1997「いわゆる土より成るグイクについてー沖縄本島北部のグスクを中心にー」『沖縄県立博物館紀要』第 23 号６頁

當眞の調査では、遺構をどのように理解しているのだろうか。當眞の理論的根拠は、村田修三の「中世的城郭の確認原則」にあると云われている。それは中世城郭の特徴として「防御された削平地を曲輪と呼ぶ。上昇斜面を削り取って、下降斜面に盛り、周辺のエッジをき

めて、その下を切岸する。城外と地続きの地形（台地や尾根続き）では、堀を掘って遮断する」というものである。つまり①防御された削平地・曲輪の遺構、②土塁状の盛り土遺構、③城外と地続きの地形の堀切が確認できれば、中世的城郭の範疇に含まれると考えているのである。しかし、小玉森の「腰曲輪」の屋敷跡は、敵の侵入を防ぐ家来の見張り小屋にしては規模が小さく、防御的機能を果たすことは出来ないと思われる。
堀切を国頭村教育委員会が測量した図面でみると、城内と城外を遮断する堀切にはなっていない。グスクの遺構と判断するには、無理があると考える。

その一方で、當眞の作成した縄張図には、重要なことが示されている。小玉森を挟むようにして流れる２つの河川である。この比地川と奥間川は、大事な要素である。与那覇岳から下っている等高線や尾根筋も、無視することは出来ないので、のちほど検討してみたい。

③　図３　国頭村教育委員会（2013）の小玉森地形測量図



資料：『比地の神アシャギ葺き替え、地形測量業務委託事業報告書』国頭村教育委員会提供

稲村の「鳥瞰図」と當眞の「縄張図」、そして国頭村教育委員会の「地形測量図」を比較してみた。稲村は「鳥瞰図」から古代部落説を述べているが、當眞は「縄張図」から石垣を伴わない土より成るグスク説を唱えている。それぞれの説の根拠は、小玉森の遺構である平場、土堤、西斜面の屋敷跡、堀切と赤木の大木をどう理解したかによるものである。両者の「遺構の理解論」を整理すると、次のような問題点が指摘できる。

小玉森の遺構の理解と問題点

遺構	稲村の理解　「聖域説」	當眞の理解　「グスク説」
平場と土堤	①風葬墓・拝所・神祠、神ｱｻｷ	①主郭・按司屋敷（土堤は防御）
西斜面の屋敷跡	②マキョ（古代部落）屋敷	②家来の見張小屋（防御施設）
堀切	③窪道、血族の分離帯	③主郭への侵入防止（防御施設）
赤木の大木	神木	
問題点	①風葬墓の裏付けがない。 神祠や神アサギは後代のもの。 ②土堤の説明がない。 ③堀切の理解があいまい。	①を仮に容認したとしても、 ②は規模が小さく、機能しない。 ③平場と尾根筋とは遮断していない 堀切は平場へ通じている。

５節．種子島の牧

種子島の牧は、沖縄の三山時代の牧に大きな影響を及ぼしたと考えられる。種子島と沖縄本島北部とは、クニガミやシオヤなどの共通名など共通点があり、北部の牧の存在を立証するうえでも重要だと考える。それで、種子島牧の歴史と牧を構成している要素は何か、調べてみた。

５－１　種子島牧の歴史

種子島の牧は、歴史が古いことと、戦後の農地改革まで存続していたため、古い牧の形態を知ることが出来る。種子島の牧の歴史を調べてみた。

①『日本書紀』巻 22　推古天皇 20 年（593）正月元旦。群卿の宴があったとき、蘇我馬子が献歌すると、天皇が「真蘇我よ、蘇我の子らは、馬ならば日向の駒、太刀ならば呉の真刀（まさび）」云々と和している。厩戸皇子（聖徳太子）の頃である。大和政権では、日向の駒が名馬として名をはせていたのである。延喜式第 28 兵部省（967 年）には、日向国（宮崎県）の牧は６ヵ所である。肥前国（長崎県）とともに国内ではもっとも多い。邨岡論文（1902）

によれば、日向の野波野牧は、大隅国渭列野牧という指摘もされている（高橋 1995）。九州の日向、大隅の馬産と中央政権とのつながりは深かったのである。

②天武８年（679 年）11 月紀によると、天武天皇は、倭馬飼部造連（やまとうまかいべ　みやつこ　むらじ）を多禰嶋に派遣している。倭馬飼部とは、馬牧の専業集団のこと。中種子町教育委員会（2014 年）『中種子町の神社・仏閣』によれば、派遣された特使は、島の地図の作成や稲作の状況などを調べ、２年後帰朝して報告した」と記されている。

壬申（じんしん）の乱（671 年）は、天智天皇の後継者をめぐって、大海人皇子（天皇の弟で後の天武天皇）と大友皇子（天皇の子）の争いである。『日本書紀』によれば、大海人皇子側の大伴連吹負らは、騎馬数十騎を率いて活躍しており、置初連兔などは千余騎を率いた、と書かれている。この乱では、騎馬だけでなく駄馬や駅馬、鞍馬、さらに神武天皇の陵に馬と種々の兵器を奉納するといったように、各方面で馬が活躍している。この戦いで勝利した大海人皇子、つまり天武天皇は、親王をはじめとする諸臣の兵馬を検校（けんぎょう）する方針を明らかにし、軽市において、装束を着けた鞍馬を集めて行進させている。次いで同 13 年閏４月には、詔（みことのり）を発して「政の要は軍事である」と述べた上で、文武百官に用兵と乗馬とを習わせ、馬を持つ者は騎士となす事を命じている。こうした一連の政策から、天武天皇が壬申の乱を通して、馬がいかに重要な役割を果たすものであるか痛感し、体系的に馬の飼育と調教を行うことが緊要な課題であると認識していた（前沢 1995「上野国の馬と牧」）。

したがって、天武天皇が多禰嶋に倭馬飼部を派遣したことは、牧の設置を目的にしたものと推測される。

③1201 年　種子島初代島主・平信基が着任した。平信基は、前地頭大浦口氏のあとをうけて、南海 12 島の領主として、居を種子島に構え、種子島姓を称した人である。初代島主により、牧畜農耕が種子島に普及したと言われている。（大山 1960）

④1352 年　種子島家第６代島主・時充は、直営の牧を南種子町西之・立石に設け、ついで北種子町国上・湊に設け、その後次第に増設し、島内 24 ヵ所におよんだ。これら直営牧場はすべて沿岸地方で製塩に適した地帯に密接している。これら牧は「塩屋牧」として発展した（大山 1960）。（写真 11　沖ヶ浜田神社）

⑤倭寇集団の根拠地の１つとして大隅地方が認識されているが、薩南諸島はどのような状況であったのか。朝鮮側が「三島倭寇」と呼んだ対馬・壱岐・松浦地方の１つである松浦党の活動が薩南諸島に及んでいたことが『種子島家譜』（『鹿児島県史料旧記雑録拾遺家わけ四』）から知られる。それによれば歴応・康永年間（1338～1345）、肥前国平戸よりたびたび種子島に商船が往来している。さらに、領主種子島時充が松浦党の一族遠藤頼堅なる人物を、客人として身を寄せた家臣とし、貞和２（1346）年頃に野間村を下賜、家老職に任用し

たとある。松浦党の広範な活動域の実態を窺う事例である（徳永 2002）。
⑥種子島の牛馬数　1646 年は牛馬 1140 頭、1762 年馬 1591 頭・牛 158 頭、1836 年牛馬 1140 頭である（大山 1960）。1646 年と 1836 年の約 200 年間を比較すると、牛馬の増加は見られない。牧は増加しているので、1 年間に生産された頭数程度が島外に移出されたと思われる。
⑦その後、民間の共有牧や個人牧なども作られて、最盛期には約 61 ヵ所に増えた。
⑧1879（明治 12）の地租改正の際、牧場地を分割して私有地にしたり、或いは「藤九郎牧」のように「強いて官有とした」ことが、牧崩壊の主たる原因であった（大山 1960）。1901（明治 34）年には、種子島の塩釜の火はすべて閉じられ、塩屋牧の人たちの移住もみられ、牧の崩壊が進んだ。そして決定的終止符を打ったのは、戦後 1947（昭和 22）年の農地改革である。農民的土地所有を図るため、私有地の徹底が図られた。そのため牧場が農地や造林地、或いは第三者への売却などで牧の基盤が崩壊するに至った（大山 1960）。

５－２　種子島牧の８つの構成要素

種子島牧の形態を描いた絵図がある。中種子町の歴史民俗資料館所蔵である。

図４　種子島の牧の絵図

資料：鹿児島県中種子町教育委員会「町立歴史民俗資料館」提供

絵図から見た牧の特徴

①牧場の区切りと規模

種子島の牧は、１里四方と言われているが、この絵では、一里四方の中に複数の牧が描かれている。牧の区切りは、川と山、谷である。人工的な区切り（土堤や掘り）はみられない。大山によれば、牧を管理する一族（マキノモン）は、総動員して牧の周囲の土堤を築いたり補修したりしている。３尺位の土堤を築き、その土堤の下を掘り下げて牛馬が逸脱しない様にする。従って其の土堤は１丈位になった（大山 1960）。

１ヵ所の牧には、馬は 15 頭、牛が６頭が放牧されている。この頭数から牧の面積を推定すると、50～100 ヘクタール以内の規模ではないかと思われる。牧馬を集団分けすると、１グループのハレムは、牡馬１頭に牝馬数頭と子馬である。

②エサ場

平地の草地と山麓の草木が、エサ場である。牧全体の面積の５～６割程度が、エサ場とみられる。馬は、イネ科の植物を好んで食べているようである。

③水飲み場

牧を区切って流れている川が、水飲み場になっている。

④畜舎代わり（立場）

猛暑や豪雨そして台風等の時、馬が避難する場所を「立場」という。樹木を描いたところが、畜舎代わりの「立場」である。原始林や大木などの樹林は、格好な立場となる。

⑤牧夫一族の住まい

絵の中央の上辺に、柵で囲まれた住宅がある。ここが牧夫の住まいである。血族の人たちである。牧の中に、部落があると言われている。こうした住宅や野菜畑に馬が侵入しないように、木柵を設置して保護してある。種子島では、この柵のことを「ウマセ」と呼んでいる。こうした牧の中に部落がある地域は、種子島以外にもある。「対州馬のいる対馬では、この馬柵を『壁』と言っている。木曽馬の飼われている開田村では、クリの木で作った馬柵で囲っている。馬柵で囲った畑を、地主の名前をつけて『一郎ケイト』と呼んでいる。ケイトは垣内（かいと）を意味している。北上山地や中国山地など馬産地の核心地では、よく見られるものである（市川 1981）。

⑥馬追い場、捕獲場

絵の上辺に、馬の蹄鉄を２つ並べたようなものがある。３の字にも見える。牧場の上の方に描かれていることから、牧場の小高い所、見晴らしの良い場所に設置されたことを示している。比較的大きい方は、直径が 10m広さで、高さ３ｍの土堤で作られた囲いである。この土堤の囲いは、馬を追い込む所でオロ（笠）と称している。小さいオロ（笠）は、直径３ｍ、

高さは３ｍの囲いで、２歳の牡馬を捕獲する場所である。

官牧での馬追は、一大イベントであった。農閑期旧歴の６月、村人総出で広い牧場の馬の群れを、馬を囲い採るオロに追い込む。オロ内の馬を捕獲して、目印の焼き印をする。所有者を明らかにするためで、カネヤキと称している。２歳の牡馬は小さいオロに移す。優良馬は御用馬用として上納し、それ以外は駄馬用にあてる。こうした馬追い行事には、必ず種子島島主が立ち会った。そのため馬追い場の上には、馬見所がおかれ、島主とその側近が視察した（写真 13）。こうしたことから馬追い場は、一大イベント会場であった。この絵図では、馬追い場のオロ（笠）が単純化されているため、状況がわからない。馬追いの様子を、写実的に描いた絵が残されている。明治時代に描かれた絵で、千葉県松戸市小金町の牧場の「馬を採るドテ絵」（写真 14）（龍山堂主人著 1854『厩馬新論』）である。

小金牧では、馬を追い込む所を「大込」、馬を捕らえる所を「捕込（とりごめ）」と称している。「周囲の高さは１丈（３ｍ）余の土堤にして、添ふるに掘りもあり、・・・あたかも一大城郭の如し（『千代田村誌』）」。土手の上には見物人だけではなく、野馬奉行が全体の指揮をとったり、記録したりする御照覧場（馬見所）もあった（青木 2003）。

⑦牧の神と依り木

絵図には描かれていないが、中種子町教育委員会が発行した『中種子町の神社・仏閣』(2014) によれば、現在、中種子町には、「牧の神」を祀るところが 29 ヵ所ある。そのうち 16 ヵ所は土地改良事業や道路整備によって移設を余儀なくされているが、元の位置はすべて、オロの近くに置かれていた。大山（1952）は、次のように述べている。

「牧には必ずマキの神がまつってある。丘陵地帯であれば山頂、小高い処、平地であれば景勝清浄の地を選んで、マキの神が鎮座する。多くは１㍍位の自然石が建ててあり、その背後には、ソテツか松木が植えられている（写真 12）。此の樹は神木であって、此を伐ると神罰たちどころにいたると信じられている。マキの神はマキの繁栄と幸福を司りたまふ。即ち馬牛の繁殖について霊験あらたかである。そこで焼物でつくった馬牛の土偶を御供えして、神霊を慰めて馬牛の繁殖を祈念し、すすんで家内安全諸事弥栄の御加護を祈念する。従って、雨乞いをすることもあるので、農にも関係がある」（大山 1960）。

⑧種子島牧の管理集団

牧を管理する人たちについて、大山（1952）は次のように述べている。

種子島では「マキは牧であるとともに、牧を基盤とする血縁団体である」。此の島では人間の集団－群－マキは牧に淵源（えんげん）、もしくは因縁をもっていると思われる会話が実存することは興味ある事実である。第一義的なる固有のマキ集団が示され、マキはイッケー（１家）、ケナーと同義とに解される。

南種子町上方赤尾坂においては、次の如き会話が、現在（1952 年）取り交わされている。「向こうに仕事をしているのは、何処のマキか。おれたち赤尾坂のマキぢゃ」、赤尾坂の親族団体は、戦前まで牧を経営していたが、此の牧には「今日は馬はおらぬのでも、現在親族団体をマキという」。マキについても、また牧を管理する親族についても、赤尾坂のマキと称している。

６節　まつがまマクと種子島牧の比較

６－１　小玉森の「まつがまマク」

沖縄北部の小玉森の遺構と、種子島の牧を比べてみよう。種子島の牧を構成する８つの要素が小玉森にあるのだろうか。種子島牧の構成要素は、①牧場の区切りと規模、②エサ場、③水飲み場、④畜舎代わり（立場）、⑤牧夫の血族部落、⑥馬追い場・捕獲場、⑦牧の神と依り木、⑧名残としての「○○マキ」名などである。小玉森の地形や自然環境、それに遺構から「８つの構成要素」が立証できれば、小玉森・まつがまマクは牧だった可能性が高くなると考える。

（１）牧の区切りと規模

牧場の区切りについては、山や川、崖などの自然地形によるものと、土堤や石塁、木柵など人工で作った囲いがある。小玉森の場合は、南北を流れる比地川と奥間川が絶好の区切りとなる。地形図を見ると、小玉森は標高 503ｍの与那覇岳の麓に位置する山岳である。馬の習性として、１頭のリーダー馬（種牡馬）と数頭の牝、それに子馬によって１集団が形成される。その縄張りは、イタリアのサルデージャ島の野生のジャーラ馬の場合、１㌔程度と見られている。この事例に照らせば、ハレム集団（牡１＋牝数頭と子馬）が１つであれば、比地川から奥間川までの平均距離を 500ｍと概算し、それに山頂に向けての１㎞を掛ければ､面積はおよそ 50㌶となる。２集団であれば 500ｍ×２㎞＝100㌶となる。山腹の囲いは崖や岩などの障害物が木柵の代わりとなる。一方、海側の方は、囲いとして木柵が考えられる。与那国の牧では、海岸まで牧馬が自由に出入りし、海水浴する馬も見られるから、木柵なしでも馬の逸脱はなかったとも考えられる。

（２）エサ場

放牧馬の粗飼料は、低地の野草と山麓傾斜地の草木などである。昭和初期に水田 18 ヘクタールが確認されるが、三山時代には湿地帯であったと思われる。乾期には、馬牛の絶好なエサ場になったであろう。草種は仲間（2012）の調査で 16 種類を確認している。イヌビワ、オオシマコバンノキ、オオムラサキシキブ、キールンカンコノキ、シマグワ、スキ、セリ、シロノセンダングサ、チガヤ、ツワブキ、ネズミノオ、ノアサガオ、ノカラムシ、ハマイヌビ

ワ、ハルノノゲシ、ホソバムクイヌビワなどである。馬は、イネ科の植物が大好物である。また粗飼料不足のときは、アダンの新芽（与那国の牧）、フクギの葉（下地島の牧）も食するという報告もある。沖縄本島北部では、年中青草があり、野草・粗飼料だけで馬の飼育は可能である。

（３）水飲み場

小玉森をはさむ２つの川、比地川と奥間川が水飲み場となる。与那覇岳の中腹には、湧水も多く、河川で水が涸れることはなかった。国頭村の河川は、流域面積が小さく、河川延長が短く勾配が急な特徴をもっている。短く急勾配の河川は、雨がふると一気に増水し洪水の被害をもたらす。従って、小玉森周辺の低地は、たえず洪水の危険を抱えていた。大雨時には湿地帯に貯まる水が、馬の飲料水に充てられたであろう。

（４）畜舎代わり（立場）

猛暑や豪雨、そして台風等の時、馬が避難する場所を「立場」という。畜舎代わりの「立場」としては、原始林や森林内が充てられる。風向きによって、「立場」の位置が変更されるので、相当数の「立場」があったと予想される。この一帯には、高さ 11～20mになる高木層として、アカギやフクギ、ホルトノキが見られる。高さ 7～10mの亜高木層は、30 種類ほどが見られ、代表的なものとしてアカミズキ、ヒメサザンカ、フカノキ、コバンモチなどがある。高さ３～４ｍの低木層は 77 種類ある。比地小玉森の植物群落は、県の天然記念物に指定されている。馬が安全に暮らせる場所といえる。なお、宮崎県御崎牧場では、15 ヵ所に立場がある（市川 1981）。

（５）牧夫・血族の住まい

国頭村教育委員会が 2013 年に作成した測量図では、小玉森の西側傾斜地に屋敷跡と思われる平場が５ヵ所見られる。堀切南側には、アマミチュウの宮がある。この周囲には６ヵ所の平場がある。仲松（1975）が、２つの血族が住んでいたと述べていることと、西側、南側双方に井戸跡があることから、アマミチュウの宮の附近にも屋敷があった可能性が考えられる。２つの血族集団が１つの牧を管理していたと考える。この住まいは、牧の中の部落ともいえるものである。

（６）馬の追い込場と捕獲場

種子島の牧では、馬を追い込む所と捕らえる所を、オロと称している。種子島の長谷牧の場合、追い込む所が直径 10m、高さ３ｍの円形の囲いで、捕獲場は、直径３ｍ、高さ３ｍの円形の囲いである（大山 1960）。

小玉森（まつがまマク）では、馬を追い込み、そして捕獲する場所はどこだろうか。それは、現在、神アシャギの置かれた平場と、その側の堀りではないかと思われる。平場は、丘

陵地の頂上につくられている。国頭村教育委員会の測量図をみると、平場は南北に約 60mで、東西は約 25m、面積にして 1500 ㎡（454 坪）である。拝所領域を外すと、60m×15mとなり、面積は 900 ㎡（272 坪）となる。周囲には、土堤が積まれている。稲村（1977）の鳥瞰図（ちょうかんず）によれば、土堤の高さは、東側と西側半分は３m、残り西側半分は２mとなっている。筆者が 2017 年 10 月に土堤を調べたところ、いずれも１m以下と低くなっていた。樹木や周辺の環境変化によって、土堤が低くなったことは明らかである。元々の土堤の高さは、３m余であった可能性が高い。平場からは、北側の小さい平場にも通じている。また平場の東と南側に大小の掘りがあり、ここも平場に通じている。東側の掘りは、幅 15m、深さ４m、延長 80mである。南側の掘りは、幅５m、深さ４m、延長 60mである（稲村 1977）。小玉森北隣のパンギナグスクもまつがまマクと一体のものであり、馬追い場と捕獲場として使われたと思われる。

この小玉森とパンギナグスクの平場と、高さ３m（一丈）の土堤の囲い、深さ４mの大小の掘りという遺構は、馬を追い込み、囲って捕獲するに適当な構造である。また、土堤に囲まれた平場が、丘陵地の尾根筋につながっていることにも注目したい。尾根筋への馬の追い込みは、馬の習性を考慮した方法である。集団の馬は、リーダー馬（種牡馬）に従って行動する。低くて広いところから、高くて狭い尾根筋に馬を追い込むことで、馬の分散を避け、１ヵ所に追い込むことが容易になる。多くの人手（勢子）を必要としない方法でもある。種子島の牧でも、比較的高いところに馬の追い込み場が置かれていた。

平場の遺構と尾根筋とのつながりこそ、牧跡を示す大事な特徴だと思う。この構造からは、牧で放牧されていた野馬を、大勢の村人（勢子）が尾根筋に向かって追い込み、尾根筋から掘りを経由して平場に入り込んだ馬を、馬捕り名人（牧士や捕手）たちが捕獲場（掘りも可能性あり）に誘導し、捕獲するという一連の様子を窺うことができる。これらは、領主（按司）が陣頭指揮をとらなければ、実現できないもので、当時としては一大イベントだったと考える。

では、小玉森（まつがまマク）の構造と同じような事例があるだろうか。種子島は比較的平地に造られた牧である。丘陵地の牧跡としては、千葉県房総半島の嶺岡牧（青木 2005）と長野県松本市の埴原（はいはら）牧（一志 1950）があげられる。両牧とも幕府の牧で歴史は古い。丘陵地の傾斜地を地ならしして、雛壇状の平場をつくり、土堤と掘りによって、桝形の囲いを築き、そこを、馬の追い込み場と捕獲場にしている。青木（2005）は、馬の追い込み場と捕獲場を、併せて「馬捕り場」と称し、その大きさについて『安房酪農百年史』によると、幅 14m×長さ 18m＝252 ㎡（76 坪）の桝形の土手を３個並べたものであると述べている。また、嶺岡の東牧の馬捕り場は、約 30m×約 20m＝600 ㎡（181 坪）の２ヵ所と記している（『丸山町史』）。

青木（2005）によれば、嶺岡牧（東牧、西牧など）の馬捕り場の大きさは、関東平野にある下総牧に比べて、半分程度である。

長野県の埴原牧の馬の追い込み場は、雛形状で６段あり、一番上が 15 間（27m）×16 間（28.8m）＝777.6 ㎡（235.6 坪）で、下にさがるごとに大きくなり、一番下の馬捕り場が 20 間（36m）×21 間（37.8m）＝1360.8 ㎡（412.3 坪）となっている（一志 1950）。降雪地帯にある埴原牧では、エサ不足の冬場に、馬を「繋飼場」に集めて飼育する。この牧では、馬捕り場が「繋飼場」としても使われたため、規模も大きく数も多くなっていると考えられる。また、埴原牧には、二重堀が残されている。いずれの牧でも、土堤・土手・土塁の跡は残されているが、その高さは確認できない。嶺岡牧の近くにある千葉県松戸市の小金牧の記録（『千代田村誌』）から類推すれば、土堤の高さは、一丈（３m）余だったと考えられる。

これらのことから、馬捕り場の大きさや形は、放牧した馬の数や立地条件によって、大小様々な形態があったことが窺われる。

次に、種子島牧や千葉県小金牧に置かれた「馬追い込み場の馬見所（御照覧場）」は、小玉森にはあったのであろうか。あったとすれば、どの位置だろうか。

當眞（1997）は、小玉森に隣接するパンギナグスク内（曲輪５）に、物見櫓（やぐら）が置かれていた可能性を指摘している。ところが、馬見所は捕獲する馬の特徴を観察できる場所になるので、小玉森の場合、平場と掘りの近くにあったと考えられる。立地条件からして、神アシャギの南側か、アマミチュウの宮附近に木柵で区切ったスペースをつくり、按司たちの馬見所にしたのではなかろうか。小玉森など丘陵地の平場が、地域の人たちに「グスク」として伝承されてきた理由の１つは、按司などが立ち会う場所があったからではなかろうか。

（７）牧の神と依り木（神木）

種子島の牧では、オロの近くに、必ず牧の神が祀ってある。丘陵地帯であれば山頂、小高い処、平地であれば景勝清浄の地を選んで、マキの神が鎮座する。多くは１m位の自然石が建ててあり、その背後には樹が植えてある。ソテツか松木が普通のようだ。此の樹は、神木である。小玉森では、神アサギ平場に神祠がつくられ、赤木の大木が神木としてそびえている。神アサギと神祠は、後の時代になって造られたもので、たぶん牧がなくなってからであろう。当初は、自然石と神木だけだったと思われる。小玉森では祠をつくるときに、３個の石塊を祠に納めたため、牧の神様より火の神様が、優先されたとも考えられる。国頭村教育委員会の報告では、赤木の神木は樹齢 250 年以上と推定され、現在５本の赤木が信仰の対象となっている。山川門中、大城門中、山城門中、神山門中によって拝まれているが、その中の最も巨大な赤木は、特定の門中の拝みの対象ではなく、多くの人に拝まれているとのことであった（赤嶺 2013）。牧のあった時代には、この赤木が牧の神の依り木（神木）として崇

められたのではなかろうか。

（８）牧の名残のマキ（マク、マキョ）

種子島の牧の名残は、先に述べたように、牧の者（マキノモノ）一族と、その地域に冠されて、〇〇マキと称されている。沖縄では「おもろそうし」や『旧記』などで「マキョ」と呼ばれ、大宜味村や国頭村では地域名としてマクが残されている。

小玉森の「まつがまマク」は、「松ガマ」という人が管理していた牧を、北山の支配者が部落名として称したのではなかろうか。それが現在、部落発祥の地として崇められている。

以上、牧を構成する８つの要素を、小玉森の地形や遺構などから考察してみた。その結果、小玉森にも牧を構成する８つの要素が備わっており、牧であった可能性が高い。牧である確証を得るためには、小玉森周辺のグスク、マキ（マク）の実態についても調べる必要がある。

（９）遺物とアマミチュウの宮

小玉森からは、埋蔵文化財試掘調査の結果、第Ⅱ層からグスク時代の遺物（青磁、カムィヤキ）の出土を確認している（赤嶺 2016）。また、神アシャギ広場の小祠（イベ前ノ獄）の東側地中から、銅鏡４個、鉦鼓１個、円鐘１個、馬具２個を、地元に住む山城久正（明治 19 年生）が拾得してある。これらの遺物は、当時、山川乙正が所蔵し、稲村（1977）によって写真に収められている。山川氏の話に依れば、部落では今帰仁城落人が、この附近に隠棲していたという伝説があるから、その所持品であろうと話している（稲村 1977）。ところが銅鏡は権力の象徴であり、鉦鼓はホラ貝同様鳴り物であり、共伴した馬具と関連づけてみれば、牧との係わりを完全に否定することは出来ない。小玉森にあるアマミチュウの宮には、牧夫たちの出身地や牧田との関係が潜んでいるような気がする。また、「ウチノウマー」という言葉の意味も、解き明かしたい課題である。

６－２　小玉森と周辺「グスク」の遺構

小玉森の遺構としては、①丘陵地の平場、②土堤、③掘り、④拝所と神木、⑤腰曲輪（屋敷跡）などが上げられる。また、平場と尾根筋が隣り合わせで、その間に掘りが設けられている。周辺の山林原野・河川からは、牧の区画やエサ場、水飲み場、立場があったことを窺うことができる。

では、小玉森周辺の「グスク」跡の遺構や自然環境から、小玉森（まつがまマク）のような牧を構成する要素が確認できるだろうか。アマングスク、喜如嘉グスク、根謝銘グスク、仲尾次グスク、親川グスクを調べてみた。現在、これら「グスク」跡の遺構は、雑木に覆われているため、実態をくわしく見ることは容易でない。幸い、當眞（1997）の「縄張図」に詳細な地図が描かれているので、それを取り上げて検討してみた。

沖縄北部のグスク遺構の比較

場所	堀切　　m	平場・土堤	拝所	曲輪	周辺の河川	遺物年代
小玉森	幅５×高４ 幅15×高４	1500㎡ 土堤高３m	神木、祠 神アサギ	5ヵ所	比地川 奥間川	13世紀～ 近世
アマン グスク	幅４×高２	400m 土堤有り	西御殿 ﾍｴ御殿	5か所	奥間川	遺物未発見
喜如嘉 グスク	幅７×高６	2000㎡ 囲いは不明	不明	5か所	幸地川	不明
根謝銘 グスク	幅６×高９	600㎡ 囲いは不明	拝所 神アサギ	7か所	屋嘉比川	13世紀～ 15世紀
仲尾次 グスク	堀切なし	140㎡ 土堤有り	ｳｲｸﾞｽｸ ﾅｶｸﾞｼｸ	4か所	羽地大川	13世紀後半 近世
親川 グスク	幅？×高９	900㎡ 土堤有り	神アサギ 祠 ｶﾐﾉﾐﾁ	2か所	我部祖川	12世紀～ 15世紀

資料：當眞嗣一 1997、赤嶺信哉 2016、宮城長信 1964、島袋善弘他 1988．名護市教委 2017

まず、牧の特徴を示す丘陵地の平場と尾根筋のつながりから見てみよう。その間に設けられた掘りが、双方を完全に遮断しているのか、一部に通じる所があるのか検討してみた。

アマングスクの堀切は、幅約４ｍで、現状の高さは約２ｍである。當眞（1997）は、「この堀切は、東に続く尾根からの侵入を防ぐ意図のもとに造られたものであるが、一本の堀切では不完全であり、まだ、数本の堀切がこの尾根づたいに存在していた可能性が高い。しかし、現状は、貯水池などの建設で地形が改変し、確かめ得ないのが残念である」と述べている。これは、堀切の目的を「遮断」という理解に外ならない。牧に造られた掘りは、馬の逃亡や害獣の進入を防ぐための「遮断」という機能だけではない。猛スピードで駆け込んできた馬を、一時的に止め、ゆっくりと進行させる「誘導路」としての機能も持っている。さらに、馬を囲い込んで捕獲する場としても使用できるものである。

親川グスクの場合、「神の道」のことが述べられている。 當眞（1997）は、「昔ノロたちが神アシャギを拝んだ後、ここを下りて大堀切の堀底道を通り、グスク西側の丘にある仲尾の殿まで歩いて行ったという聞き取り調査」のことを紹介している。この「神の道」を逆のルートで進めば、尾根筋から掘底道を通り、神アシャギの平場に通じることになる。ここでも、堀切は「遮断」の目的で造られたものではないことを意味している。小玉森でも、堀り

を「窪道」と称し、「神の道」と考えた人がいたようである。當眞（1997）は、小玉森の掘りについて「幅約５m、深さ３mの窪道と称される空堀によって３つのグループに区画され、そして、堀底を通路として３つのグループが連結する構造をとっていることが看取される」と述べている。また、喜如嘉グスクについては、「南側の尾根続きを遮断した堀切を認めることができる」としながらも、「堀底の西寄りに土橋が認められる。曲輪１の南側斜面、つまり、堀切から曲輪１に連なる傾斜面に腰曲輪ロが取り付いている」と述べている。つまり、喜如嘉グスクの場合、堀切はあるが、完全に遮断したものではなく、「土橋と腰曲輪ロ」によって平場と尾根筋はつながっているのである。根謝銘グスクについては、「平場６と尾根の間に掘りが造られている。堀切の南側は、尾根続きになっており、尾根の両側を削り落として幅を小さくし、２～３人の人間が同時に通れないようにしてある」と述べている。これは、駆け込んできた集団の馬を、一頭ずつ誘導するに適当な構造だと思われる。仲尾次グスクには、掘りはない。平場５の南側の入口から西側の通路を上り、平場１に通じるようになっている（當眞 1997）。

小玉森周辺の「グスク跡」に残された平場の規模であるが、仲尾次グスクを除けば、400 ㎡（121 坪）から 2000 ㎡（606 坪）と大きい。平場の数は２～３ヵ所で、馬の追い込み場と捕獲場と考えられる。ところが、丘陵地の平場が、根謝銘グスクでは８ヵ所も造られ、仲尾次グスクも５ヵ所と多く、雛壇状に段差をもって連なっている。この数は、長野県埴原牧の平場の数と同じで、繋飼場としても使われた可能性が考えられる。

「グスク跡」の土堤については、その存在した痕跡を残すものの、高さを確認することは出来ない。長年の風雨によって、大きく変貌しているからである。「グスク跡」には、御嶽、御殿、神アシャギ、神祠、拝泉などの拝所が残されている。御嶽や御殿は、元々からあったものであろう。一番上の平場に置かれている。後世の人たちが造った神シャギや祠は、一番上の平場にはない。

「グスク跡」周辺の自然環境からは、牧の規模を除けば、エサ場、水飲み場、立場があったことが推測することができる。

以上のように、小玉森周辺の「グスク跡」の遺構と自然環境からは、牧を構成する要素が概ね窺える。そして見落とせないのは、「グスク跡」から中国製の陶磁器が出土し、調査所管の市町村教育委員会などによって、13 世紀から 15 世紀と年代が推定されていることである。この年代に、沖縄北部の牧が運営されていた可能性が高い。この時期は、琉球から明国へ貢馬が贈られていた時期である。明国への貢馬は、1374 年に始まり、1547 年までの 173 年間が最盛期である。それ以降 1680 年までの 133 年間は、外交的・儀礼的な貢馬であった。

６－３　牧の歴史的背景

これまでみてきたように、マキョやマクなどと呼ばれている血族や部落名は、牧があったことの名残と考えられる。また「土で成るグスク」も城ではなく、牧であった可能性が高い。時期的には、13 世紀から 15 世紀の間に牧が運営されていたことになる。この遺物から考えてみると、牧の存在した時期は、北山王から北山監守の時期であり、明国に貢馬を贈ったという『明実録』の記録とぴたりと一致する。つまり、牧と貢馬が同時期となっている。

北山王の貢馬は、27 年間で合計 188 頭（10 回）である。１年平均すると７頭の貢馬となる。１頭の貢馬の対価は、銀 18 両から 19 両であり、通常の馬の値段・銀 10 両より高く評価されたという（池谷 2011）。池谷によれば、絹織物５疋、陶磁器 1,500～1,700 個、鉄釜 24 個が貢馬 1 頭の対価である。北山王は年７頭の貢馬の見返りして、陶磁器だけで 10,500～11,900 個受け取っていたことになる。この陶磁器は、領民たちの支持を得るために、按司や馬の生産者にも支給されたであろう。各地の遺跡から出土した中国陶磁器は、それを裏付けている。

まさしく、貢馬は北山王の政権基盤を固めるための、戦略物資・特産品であったのである。したがって、貢馬を確保することは、政策的に優先課題であったと思われる。貢馬確保の政策課題とは、どのようなものであったか。量質両面から検討してみよう。年間に必要とするのは、貢馬だけではない。城内の役人が使う御用馬、兵馬、そして荷物を運ぶ駄馬などである。毎年、50 頭から 100 頭規模を想定しなければならない。そのためには、各地に牧を設置する必要があった。古代牧でも明らかなように、牧というのは、中央政府の組織力でつくられている。広大な牧場を独占することは、血族一門の力でできるものではない。100 ヘクタール前後の広大な山林原野を牧として占有するための権利、堀切作業、馬追い捕獲や調教の仕事などは、集団の力・組織力が必要である。つまり牧設置は、自然発生的にできるものではない。按司やそれ以上の権力、本格的には北山王になってから設置されたとみるべきである。

沖縄本島北部には、種子島など薩南諸島や奄美群島から渡来した人びとが、馬飼い技術とともに製塩、鍛冶、稲作などの技術をもって、北山王を支えたと考えられる。沖縄北部と薩南諸島・奄美群島とのつながりは、次の事項があげられる。まず第一に、小玉森周辺には、アマミキヨ・アマミチュウの渡来伝説とアマミチュウの子孫・泉川家の祖先がミルク田に稲作を導入した伝説がある。アマミグスク跡は、カニマンという部落発祥地であり、鍛冶の伝来説がある。砂鉄が採れるのは種子島で、浜砂鉄産地は全島８ヵ所に及んである。(鮫嶋 2011)。奄美群島からは砂鉄はとれない。そのため、国頭村のカニマンは、種子島からの渡来人の可能性が高い。第二は、北部の「国頭」と種子島の「国上」は同名である。北部の国頭は、以

前「国上」と呼んでいたという（赤嶺 2013）。大宜味村の「塩屋マキ」（シュヤマク）と種子島の「塩屋牧」も同名である。大宜味村では塩屋の由来を、首里城からの落人との説もあるが、それ以前からあったという説もある（『大宜味村史』1978）。それ以前とは、種子島の塩屋牧からの伝来が考えられる。第三に、奄美大島と沖縄本島北部の「土より成るグスク」には、「掘り」という共通性がある。沖縄北部の「掘り」からは、「牧」の遺構が窺われる。第四に、小型な馬という共通性である。小型な「琉球馬」と小型な「トカラ馬」、そして、種子島の遺跡から出土した「小型ウマの骨」である。種子島の小型馬は「上能野貝塚」出土の馬骨を、西中川（2011）が鑑定している。「トレンチＢの１層からウマの右肩甲骨と右中足骨が出土している。これは成熟個体のもの。この馬骨は、シカなどの出土していない所から出土しておりしており、同時代のものかは疑問が残る。中足骨は最大長 230.8 ㎜、近位端 41.8 ㎜×40.0 ㎜、中央部 25.4 ㎜、遠位端 38.0 ㎜×29.5 ㎜である。体高を算出すると、約 116 ㎝となり、トカラ馬大の小型馬であったことが推定される」（西中川 2011）。第五は、マキ、マキョ、マク名である。種子島、奄美大島、沖縄北部に残されていた。

馬を、1 年に 50 頭から 100 頭も生産する体制づくりは、北山王にとって緊急な課題であったと思われる。各部落ごとに山林原野を与え、各地の部落民を集めて堀をほり、そこに血族のものを集め、牧を管理させる。そして各牧を掌握するため、地域ごとに「〇〇マキ」という名称をつけ、行政単位をつくったと考えられる。牧を行政単位とした事例として、東北糠部では、一戸（いちのへ）～九戸（きゅうのへ）という言い方で、牧と馬の産地を区分をしている（入間田 1995）。また、韓国済州島では「「牧」は現在の「道」あるいは「広域市」にあたる最上級の地方行政単位でした」（金日宇他 2015）。

こうした施策は、貢馬や御用馬、兵馬、駄馬の生産を、政権基盤を固める重要政策にしていた北山王の立場からして合理的なものと考える。

次に、牧場で自然繁殖によって生産された牡馬は、２歳になれば馬追い行事で、補場に追い込まれ捕獲されたと思われる。その時は補場の上の馬見所に按司や領主が立ち合い、優良馬を点検したことが、種子島牧や千葉県小金牧の事例から考えられる（写真 13､14）。この優良馬は、調教され貢馬や御用馬・兵馬の候補となる。それ以外の馬は、駄馬用として育成される。古代牧では裕福な者に調教をさせることになっていた。三山時代では、馬の調教は按司たちの仕事ではなかっただろうか。石垣で囲った「グスク」が、按司の屋敷だったのであれば、この中で馬を飼い、調教したことが考えられる。「宮古島の牧」の節で触れたように、牧の語源は、『和名抄』によれば「牧はムマキで、馬城（マキ）」のことである。「馬城は馬を内に囲い、外から防ぎ、保養する場の義とすべきである」（高橋 1995）。マキ（馬城）を後世の人が、グスクと呼んだのではなかろうか。マキ（馬城）は、場所によっては跡

地利用されるところもあり、城壁など強固な防御施設を構築した所が、今帰仁城などのお城ではなかろうか。今「グスク」と称されている所は、時代とともに変遷してきたと考える。

こうして馬城（グスク）で調教された各地の馬を１ヵ所に集めるのが「馬揃い」である。「馬揃い」は、強い組織力があって可能となる。体格や乗用適正馬としての能力を審査するのが「献上馬や御用馬の御目利き」である。その御目利き役は、首里王府時代は野國親雲上や真喜屋親雲上が務めていたことから、三山時代でも高級役人が担当したと思われる。名護市羽地の字真喜屋にある「上之御嶽」の子孫が、「馬の御目利き役」のように思われる。首里王府の別当・真喜屋親雲上が、羽地や真喜屋の土地柄と深くつながった人だからである。真喜屋中宗家の家譜によれば「4 世實継は、1638 年尚豊王の世代に小赤頭になる。1660 年首里城火災の時大事な書類を持ち出して火難を免れた。その褒美として今帰仁代官を 3 年勤めた。1664 年に薩摩で馬術の技法を学び、3 年にして帰り御馬の別当に任じられた。1688 年尚貞王の世代に、羽地間切真喜屋地頭職に任ぜられた」人である。しかも、この一門のすごさは、首里王府の別当職を尚泰王の世代（1843-1901）まで、代々引き継いできたことにある（長濱 2014）。

献上馬・貢馬の審査会場は、馬場である。伊波（1935）は、馬場の呼び方について紹介している。「馬場」を「ウマバ」と呼び、その他に「馬追」、「馬道」、「馬路・マーヂ」、兼久、ヂョー（門）などの呼び名があったと述べている。馬場が、多様な呼び名で残されたことは、馬場の目的が「馬揃い」と「乗用適正馬の御目利き」であり、「競馬」という「レクリエーション」が目的ではなかったことを意味している。『国頭村誌』によれば「辺土名西平に馬追（馬場）が存在していた」と記されている。また、『大宜味村誌』には「大宜味間切ではかつて馬の飼育が盛んであった時代があり、塩屋、大宜味、喜如嘉などには馬場が残っている」と記されている。ただし、この記録では「馬場」がいつ頃つくられたのか不明である。1737 年の乾隆検地の測量をもとにして、馬場の規模を記載した「琉球国之図」（1796 年）がある。これによれば、沖縄本島北部の馬場は、次の通りである。国頭村には桃原馬場（赤丸岬）、大宜味村には喜如嘉馬場、今帰仁村には仲原馬場、名護市には大兼久・伊差川・汀間馬場、恩納村には南恩納馬場、金武町には金武馬場である（梅崎 2012）。1737 年といえば、蔡温の時代である。当時は国頭地方の各間切に、馬場が置かれていたことになる。このことは、三山時代から引き続き、蔡温の時代まで沖縄本島北部に牧が健在であったことを示唆している。馬場からは献上馬などが選抜され、今帰仁城に届けられたと考えられる。

６－４　沖縄北部の牧の崩壊

種子島の牧が完全に崩壊したのは、戦後の農地改革である。共有地としての牧を、私有地に切り替え、農民的土地所有制度にしたことが、牧の基盤を崩壊させたのである。沖縄本島北部では、蔡温の杣山保護行政が、牧を崩壊させた直接的な要因として考えられる。首里王府の最高決議機関は評定所である。評定所から 1737 年に発布された「山奉行所規模帳」は、蔡温が起案した「林政八書」の 1 つである。「山奉行所規模帳」第 17 項には「土手内の山に牛馬、山羊などを放し飼いしている者は、罰金 20 貫文を言い渡し、10 貫文は見つけ出した者に渡し、残りの 10 貫文は山の造林費に充てること」と罰則規定がある。王府は「杣山盛生之為不履成」ことを理由に、杣山内の放牧利用を禁止して、舎飼いあるいは「杣山端々之敷山」を牛馬牧の代地として利用するよう指導していた（仲間 1984）。この「杣山内の放牧禁止令」は、裏返せば、馬の放牧が杣山内に自由に行われていたことを意味している。「山奉行所規模帳」の罰則規定などにてらせば、杣山内の放牧は大がかりに展開されていたと推測される。北山王のとき、貢馬生産のために設置した牧場が、使用されていたと思われる。「山奉行所規模帳」が公布された 1737 年には、中山（首里王府）から明国への貢馬は終了している。首里王府の馬産政策は、江戸献上馬や御用馬を確保するため、馬の産地が宮古島と八重山に移った時期である。

放牧の取り締まりは、山奉行所を設置して行われた。最初は国頭方山奉行２人、筆者６人、中頭方山奉行１人、筆者１人が配置されていたが、その後、国頭方は西山奉行が恩納・名護・本部・今帰仁各間切を管轄、東山奉行が金武・久志・羽地各間切を管轄、加増山奉行が大宜味・国頭間切を管轄する３奉行、12 筆者体制に強化された。そのほかに那覇港に船改奉行３人、泊港に２人を置き林産物の取り締まりを行った。さらに、間切と村には、総山当・山当・山師・山工人という杣山を保護取り締まりする役人が配置された。総山当は三司官が任命し、間切番所につとめ、山当は御物奉行が任命し村屋につとめた。山師や山工人は地頭代が選び、これらの役人には俸禄手当が支給された（『国頭村史』2016）。

こうした、大がかりな取り締まりの結果、「大宜味村は、かつて馬の飼育が盛んで、塩屋、大宜味、喜如嘉に馬場があったが、山林取り締まりが厳しくなった後、用材、薪炭の運搬はもっぱら人力にたよることになったという（『大宜味村史』通史編 1974）。杣山内での馬の放牧禁止令が、「密告制度」によって運用されたため、村人たちの間には、疑心暗鬼を生ずるようになった。認められていた「馬の舎飼い」も、自ずと辞めざるを得ず、「王府時代には、国頭間切と大宜味間切は、馬の禁止区域とされた」と認識するような事態となり、「馬はほとんど飼育されなかった」（『国頭村史』2016）のである。

このように、首里王府は杣山保護策を徹底するため、杣山内の牛馬の放牧を厳しく禁止し、そのことが結果として、沖縄北部で馬が飼育できない状況をつくりだしたのである。

国頭村のマキ（マク）は、もともと牧を基盤とした部落や血族であったにもかかわらず、蔡温の杣山保護政策に端を発した、山奉行所の厳しい「杣山内の放牧禁止」の取り締まりによって、「マキと馬」が人びとの記憶の中からも消されてきたのではあるまいか。その名残が、「マキョ」や「マク」の地域名として残されたと考えられる。

７節．日本の古代社会牧（古墳～鎌倉時代）

沖縄本島北部の「古代部落マキョ」と呼ばれている場所を、牧場跡と立証するために、種子島の牧を調べてみた。種子島の牧との関連で、日本の古代社会牧との比較も大事と思われるが、ここでは「古代社会牧」に関する資料を引用するにとどめた。

（１）応神天皇 15 年に百済王が阿直岐（あちき）を遣わし、良馬２匹を献上し、軽坂の厩で飼育させた。飼育にあたる専業集団として、河内馬飼部、倭馬飼部などが置かれた。（前沢 1995）。河内の馬飼部に関しては、大阪府四條畷市蔀屋北遺跡が注目されている。この遺跡からは、埋葬馬の全身骨格が完全な形で出土している。分析の結果、朝鮮半島百済から導入された５～６歳馬で、体高 126 ㎝、生存時期は 5 世紀半頃とされている。この遺跡からは、当時の馬飼い集落の遺構なども見つかっている。遺物によって、百済からの渡来人は、製塩、製鉄、製糸、農業をしていたことが明らかになった。土坑の埋葬馬と骨格標本は、大阪府立近つ飛鳥博物館に所蔵されている（近つ飛鳥博物館　館報 12）。日本に初めて馬が渡来した時期、その経路、馬の形質を明らかにしたのが、「蔀屋北遺跡」である。

（２）法制度・厩牧令　大宝律令（701 年）が制定され、それに基づく厩牧令で軍団の騎馬は、牧から供給されると定められた。律令制度を運営するのに必要な馬牛を確保するため、各地に官牧を設置して、繁殖と調教の拠点にしたので、中央政府が本格的に馬牛の組織的な飼育に乗り出した政策と言うことが出来る。（前沢 1995）

『中国文明史』秦漢（稲畑監修 2005）によれば、秦は建国後（紀元前 221～前 206）、馬の生産を建国の源とみなし、国中の馬の記録を作成した。そして、毎年定期的に馬の品評をおこない、優良な品種を選び出した。秦政府は馬の管理のために、「厩苑律（きゅうえんりつ）」を制定し、馬の生産業を損なう行為に対して徹底的に処罰した。

牧や馬の法令を記した養老律令の「厩牧令」は、唐の法令を真似たと言われている。これには馬が死亡した場合、皮や脳をとって役所に納めることが定められている。

なお、首里王府が宮古島に公布した『富川親方規模帳』（1873）には、百姓が畑に往来する場合でも、乗馬してはならず、馬は老衰しても屠殺してはならず、必ず自然死させること。皮は剥ぎ取り上納し、肉は埋葬することが定められている。このことが、牧中の遺物包含層

から馬歯骨の出土の少ない理由である。

（３）牧の目的　厩牧令の牧馬応堪条によると、牧の馬の中で乗用に堪えるのを選んで軍団に所属させ、家が富んで養うことのできる者には、飼育、調教させることとされていた。これは軍団の官馬あるいは兵馬とよばれ、中央政府の兵部省に属する兵馬司が管轄していた（前沢 1995）。乗用適馬以外の馬は、運搬用の駄馬として経済活動を支えた。

（４）馬の用途　馬の用途で見落としがちなものに、その皮の利用がある。古代において、皮とそれを鞣した革は、衣や帯、履物の装身具として、また敷物や袋、漆皮箱、太鼓、鼓などの調度具、甲冑や鞆、鞘などの武具、さらに馬具などの様々な分野で使われる基幹物資であった。

養老令の厩牧令の官馬牛条によると、官馬も私有の馬も生きている内はもちろん、死んだ場合でも勝手に扱うことは許されておらず、その皮、脳などは回収されることが基本とされていた（前沢 1995）。

（５）牧の管理人　　奈良時代の初めの頃には、各地に官牧が設けられていたが、厩牧令では牧ごとに管理に当たる責任者として、牧長１人、事務担当者として牧帳１人がおかれ、それには地方の有力者が任命された。その下で実際に仕事を行う牧子や飼丁には、一般の百姓が充てられ、貧乏の民と呼ばれる事もあった（前沢 1995）。904 年太政官符で「応勅旨諸牧別当」が置かれた。別当は１牧の長官として任命された官職である。一国の牧を総監する責任者は国司、国司と牧長の間にあって牧を統率する職務が別当職である。

（６）牧の区切り　牧では人家や田畑に被害が生じないような島や中州、あるいは川や沼、崖などで区切りやすい地形の場所が選ばれた。また、土塁や溝によって人為的な区画が設けられる場所もあった（前沢 1995）。

（７）　５～６世紀の頃、河内（大阪）、淀川（京都）の川べりなどの草原が、天皇家の「勅旨牧」として使用された。牧は広い土地が必要であり、平安時代になると上野国（こうずけのくに）（群馬県）、信州国（長野県）、甲斐国（山梨県）、信濃国（しなのぐに）（長野県）に勅旨牧・御牧、官牧が設置された。鎌倉時代になると、東北の糠部に牧が設置され、一戸（いちのへ）から九戸というエリア名で呼ばれるようになった。その後、民間の牧が許可され、全国に普及した（入間田 2015）。

上記の古代社会牧の特徴を整理してみた。

①大和王権時代（５世紀中頃）に、百済から馬と馬飼い技術者が渡来した。渡来人は、製塩、製鉄、製糸、農業などをしていたことが遺物から明らかになっている。

②８世紀の初期、法制度として厩牧令が制定された。中央政府による牧の設置。

③牧の目的は、軍馬と兵馬の調達であり、牧で馬を繁殖させ、裕福な者が調教した。乗用

適馬以外の馬は、駄馬として経済活動を支えた。

④官馬、民馬いずれも、死んだ場合は皮を剥ぎ鞣して、役所に上納した。

⑤牧の管理人には、地方の有力者を任命し、牧夫は一般百姓を充てた。

⑥牧は、自然の地形（島、中州、川、崖など）と、人工による土塁、溝で区切った。

⑦牧には馬のエサ場、水飲み場、立場など広い土地が必要である。そのため、開発の進まない地域に設置された。勅旨牧や御牧など官牧が先行し、民間（地方の領主、寺院）の牧は、後から普及した。

８節　考察

１．沖縄の古琉球時代に、北山王から明国の皇帝に貢馬が贈られた。当時の馬の産地を調べるため、北山王の領地であった沖縄北部の国頭村や大宜味村に、牧は存在したかどうか調べてみた。

２．明の国史「明実録」には、北山王が明の皇帝に貢馬を贈ったことが詳細に記されている。また、北山王の館・今帰仁城に兵馬訓練場があったという伝承と、城内の「大隅」から、古い馬の歯骨が出土している。

３．国頭村や大宜味村では、マキョやマクという古い地名が残されている。伊波普猷や仲松弥秀、稲村賢敷の論説は、マキョ・マクという言葉を、「血族集団、祭祀集団、古代部落」の意味だと述べている。一方、大林太良、吉成直樹、大山彦一は、マキョ（マキ）は、牧であるとともに、牧を基盤とする血縁共同体であると述べている。

４．国頭村比地の小玉森は、「まつがまマク」とも呼ばれたところである。稲村賢敷は「小玉森の鳥瞰図」描き、古代部落跡だとの見解を示している。當眞嗣一は「小玉森の縄張図」を描いて、土より成るグスク跡であるとの見解を示している。小玉森に残された平場、土堤、掘りなどの遺構を、どのように理解したかで見解が違っている。

５．種子島の牧を調べてみたら、牧を構成する要件が８つあることがわかった。①牧の区切り、②エサ場、③水飲み場、④畜舎代わり（立場）、⑤牧夫一族の住まい、⑥馬の追い込み場、捕獲場、⑦牧の神と神木、⑧　牧の名残（牧の管理人や地名にマキを附す）である。

６．種子島の牧を構成する８つの要件に照らして、小玉森（まつがまマク）を調べてみた。①牧の区切りは比地川と奥間川、②エサ場は野草の豊富な傾斜地、③水飲み場は川、④畜舎代わりは山林、⑤牧夫の住まいは腰曲輪の屋敷跡、⑥馬追い込み場と捕獲場は、土堤に囲まれた平場と掘り、⑦牧の神と神木は、「祠の中の石イビ」と赤木の大木、⑧牧の名残は「まつがまマク」。以上のように、牧を構成する８つの要件が備わっている。

７．小玉森とともに、近隣の「グスク跡」の遺構と自然環境を調べてみた。當眞の「縄張図」

によって「グスク跡」の概要を点検してみると、牧を構成する要件の大半を窺うことができる。「グスク跡」から出土した中国産の陶磁器から、13 世紀から 15 世紀頃の年代が推定されている。この時期は北山王から監守時代までの時期であり、琉球から明国へ貢馬を贈った時期（1374～1680）と一致する。

８．国頭間切や大宜味間切で蔡温時代までに「馬場」が存在したことは、それ以前に、多くの馬を集めて、優良馬を選抜したことを意味したもので、牧の存在を窺わせるものである。首里王府は杣山保護策を徹底するため、1737 年に「山奉行所規模帳」を公布し、沖縄本島北部の杣山内での牛馬の放牧を厳しく禁止した。国頭村や大宜味村ではマキ（マク）は、もともと牧を基盤とした血族や部落であったにもかかわらず、蔡温の杣山保護策に端を発した山奉行所の「杣山内牛馬の放牧禁止」の厳しい取り締まりによって、「牧と馬」が人々の記憶の中からも消されたのではあるまいか。牧の名残が、「マキョ」や「マク」の地域名として残されたと考える。

９節　今後の課題

今後の課題を整理しておきたい。

１．宮古島の牧の考察で重要なことは、13 世紀頃の宮古島に牛がいたことを化学的に立証することである。平良久松地区のミヌズマ遺跡から出土した牛骨は、「C14 年代測定」によって 13 世紀前半から 14 世紀（西暦 1223 年から 1364 年）頃に、生きていた牛であることが明らかになった（宮古島市教育委員会 2018）。ところが、牧と関係すると思われる高腰城跡や保良元島遺跡から出土した牛骨は、まだ年代測定はされていない。今のところ、共伴物によって 12～13 世紀と推定されている。牛牧の立証のために、年代測定が不可欠だと思っているので、関係機関にその実施を依頼していきたい。

２．牛骨の年代測定と合わせ、牛の四肢骨の測定値による生体時の体型推定が必要である。どういう体型の牛が飼育されていたのか、渡来経路を明らかにするためにも必要である。これまでに、県内遺跡から出土した牛の歯骨より、生存時の体高が推定されているのは、浦添城跡（浦添市）120.86 ㎝、喜屋武グスク（うるま市）116.98±6.04 ㎝、阿波根古島遺跡（糸満市）117.78±8.14 ㎝、新里村遺跡（竹富町）120.70 ㎝、ジリグスク（東風平）121.16±9.92 ㎝、高峰遺跡（豊見城市）114.94 ㎝となっている（西中川外 1991）。日本古代の形質を受け継いでいるといわれる在来牛は、今なお、見島牛（体高雄 132 ㎝、雌 114 ㎝）および口之島牛（体高雄 122 ㎝、雌 112.0 ㎝）がいる。こうしたことから、沖縄県内出土の牛の遺存体は、口之島牛と見島牛の範囲内で、日本在来牛の形質を備えていると見られている（西中川 1991）。宮古島の「古い遺跡牛」の体型や形質についても、調査が必要である。

３．沖縄本島北部の古代部落といわれている「マキョ」と「グスク」のフィールドワークを増やすことが必要である。古代部落やグスクの範囲を越えて、牧の可能性を含めた広範囲な調査、正確な地形図作成が重要であり、それには、市町村文化財担当の協力を得なければならない。また、遺構である堀切の調査は、沖縄本島北部だけでなく、奄美群島でも行われている。奄美市笠利町の国指定史跡赤木名城跡については、歴史的変遷として①端緒的段階（平安から鎌倉時代）、②展開段階（南北朝から室町時代）、③後代利用段階（薩摩侵攻以降）の３段階が理解され、研究が進められている（奄美市教委 2015）。尾根と係わる堀切の遺構について、端緒期段階ではどうだったのか、特に注目していきたい。奄美群島のグスクの特徴は城郭に加工された石材が少ないことと、防衛機能がそれほど強くないことであり、これは先島諸島と類似していて、沖縄本島とは異なっている（三木靖　2015）。この点にも注目していきたい。

謝辞

国頭村教育委員会・学芸員の赤嶺信哉さんには、小玉森を案内頂き、また、貴重な小玉森に関する調査資料を頂いた。基礎教育アドバイザーで元校長・伊計徳善さんには羽地真喜屋の上之御嶽を案内頂いた。筑紫女子学園大学の教授・松下博文さんからは、種子島の牧を研究した大山彦一著『南西諸島の家族制度の研究』をご恵送頂いた。また、親戚一族につけられた、牧の名残「マキ」についてご教示頂いた。鹿児島県中種子町教育委員会の田平裕一郎係長と稲垣友裕学芸員には町立中種子歴史民俗資料館を案内頂き、牧にかんする資料を賜った。また、中種子町議会事務局長・田中晋二さんには、牧の現地調査の段取りをして頂いた。種子島鉄砲館の参与・鮫嶋安豊さんには、塩屋牧跡などの現地を案内頂き、著作『写真で見る種子島の歴史』を賜った。鹿児島大学の名誉教授・西中川駿さんからは、種子島の遺跡から出土した小型馬の遺骨について、分析結果をご教示頂いた。琉球大学名誉教授・仲閒勇栄さんからは、国頭村の植物民俗誌にかんする著作『島社会の森林と文化』をご恵送頂いた。和式馬術探求会の鈴木純夫さんからは、千葉県小金牧の資料をご恵送頂いた。日本騎射協会会長・宮川昇さんからは、古代牧の資料をご恵送頂いた。宮古島市の元部長・宮川耕次さんからは、狩俣の古謡の中の「マキャ殿」についてご助言頂いた。狩俣の池間景清さんには、集落の東門、北門それに集落を囲む石垣を案内して頂いた。宮古島市総合博物館の学芸係・新田由佳さんには、地図や写真の貼り付けと原稿校正に協力して頂いた。故妻・長濱のり子には沖縄北部のグスク調査と種子島牧調査を手伝ってもらった。ここに記してお礼申し上げます。

参考文献（五十音順）

青木更吉 2003『小金牧を歩く』崙書房出版
青木更吉 2005『嶺岡牧を歩く』崙書房出版
赤嶺信哉 2013『比地の神アシャギ葺き替え、地形測量委託業務報告書』国頭村教育委員会
赤嶺信哉 2016『鏡地配水池建設工事（仮称）に伴う試掘報告書』国頭村教育委員会
奄美市教育委員会 2015 更新『国指定史跡赤木名城跡保存管理計画書』奄美市役所ＨＰ
池谷望子 2011「琉球の国際貿易の開始」『南島史学』77-78　31-48
市川健夫 1981『日本の馬と牛』東京書籍
一志茂樹 1950『信濃』２―４所収「官牧考―長野県埴原牧を中心として―」
稲村賢敷 1957『琉球諸島における倭寇史跡の研究』吉川弘文館
稲村賢敷 1972『宮古島庶民史』三一書房婦
稲村賢敷 1977『沖縄の古代部落マキョの研究』至言社（東京）
伊波普猷 1935「ドルメン」『伊波普猷全集』第７巻 1974 平凡社
伊波普猷 1940「琉球国由来記解説」『伊波普猷全集』第７巻平凡社 538－496
入間田宣夫 1995「糠部の駿馬」『馬の文化叢書』中世　網野善彦編　馬事文化財団 145-176
入間田宣夫・横濱道成・諫早直人 2015「馬文化の発展経路」『日本人と馬』東京農業大学 104-135
梅崎晴光 2012『消えた琉球競馬』ボーダーインク
梅崎晴光 2016「沖縄県立博物館・美術館　文化講座配付資料」
大宜味村 1978『大宜味村史』資料編
大城慧編 1983『宮古の遺跡　詳細分布調査』沖縄県文化財調査報告書 54 集
大林太良 1995『北の神々　南の英雄』小学館
大山彦一 1952「種子島マキの研究」『鹿児島大学文科報告』第１
大山彦一 1960『南西諸島の家族制度の研究』関書院
沖縄県教育委員会 1990『グスク調査報告書（Ⅱ）』宮古諸島
金子エリカ 1985「保良元島発掘 20 年後」『沖縄文化』21（2）9－18
金日宇・文素然 2015『韓国・済州島と遊牧騎馬文化』井上治監訳　明石書店
球陽研究会 1978『球陽　読み下し編』角川書店
久貝弥嗣 2011「11～13 世紀における宮古の遺跡」『沖縄考古学会 2011 年研究発表会』31-36
城辺町教育委員会 1987『大牧遺跡・野城遺跡－範囲確認調査報告書』
城辺町教育委員会 1989『高腰城跡　範囲確認調査報告書』
城辺町教育委員会 1990『 城辺町史』第５巻　民話編

城辺町役場 1962『町政施行 15 周年記念誌』
城辺町吉野部落 1978『 吉野創立 50 周年記念誌』
国頭村役場 2016『国頭村史くんじゃん』村政施行百周年記念
佐々田伴久 1922『馬政局時報』陸軍省馬政局 100-130
鮫嶋安豊 2011『写真で見る種子島の歴史』たましだ舎
島尻勝太郎 1981「与世山親方宮古島規模帳解題」『平良市史』第三巻資料編前近代
島袋善弘他 1988「仲尾次グスク」『県営仲尾次地区土地改良事業に伴う埋蔵文化財範囲確認調査報告書』名護市教育委員会
下地和宏解釈 2010「与世山親方宮古島規模帳」『宮古島市史資料』3　宮古島市教育委員会
下地和宏 2012「集落の広がりと渡来人」『宮古市史　宮古の歴史』第一巻　55-63
新里幸昭 2005『宮古歌謡の研究』文進印刷
高橋富雄編 1995『馬の文化叢書』第二巻古代－馬と日本史　馬事文化財団
段木一行 1995「古代末期東国の馬政」『馬の文化叢書』３巻中世馬と日本史 馬事文化財団
當眞嗣一 1997「いわゆる土より成るグスクについて－沖縄本島北部のグスクを中心に－」『沖縄県立博物館紀要』第 23 号　1-18
徳永和喜 2002「中国・東南アジアとの交流」『鹿児島の湊と薩南諸島』松下志郎・下野敏見編 80-93　吉川弘文館
富川親方農務規模帳 1873『稲村編宮古島旧記並びに史歌集解』 1962 琉球文教図書 256-278
中種子町教育委員会 2014『中種子町の神社・仏閣』
中種子町立歴史民俗資料館 1987『中種子の牧の資料』
長濱幸男 2012「高腰城跡から出土した馬歯の C14 年代測定について」『宮古島市総合博物館紀要』16 号 26-30
長濱幸男 2013「宮古馬のルーツを探る（続）」『宮古島市総合博物館紀要』第 17 号 16-40
長濱幸男 2014「宮古馬のルーツを探る（３）－尻並第二遺跡出土のウマの遺体、宮古島在番と献上馬、および明国への貢馬の評価－」『宮古島市総合博物館紀要』第 18 号 24-71
仲松弥秀 1975『神と村』伝統と現代社
仲間勇栄 2012『島社会の森林と文化』 琉球書房
仲間勇栄 2017『蔡温と林政八書の世界』榕樹書林
名護市教育委員会 2017 更新「親川グシク遺跡」『名護市の遺跡情報』名護市役所 HP
南島地名研究センター編 2005『南島の地名』仲松弥秀先生カジマヤー記念号ﾎﾞｰﾀﾞｲﾝｸ
西中川駿・本田道輝・松元光春 1991『古代遺跡出土骨からみたわが国の牛、馬の渡来時期とその経路に関する研究』

西中川駿 2011「遺跡から出土する動物たち」『西中川駿先生古稀記念論集』165-172
東恩納寛淳 1950『南島風土記』東恩納寛淳全集７第一書房
比嘉政夫・高良倉吉 1997「解説」『稲村賢敷沖縄の古代部落マキョの研究』1-9 至言社
平良市教育委員会 1994『平良市史』第９巻資料編７御嶽編
藤田豊八 1917「琉球人南洋通商の最古の記録」『史学雑誌』28-8）407-416
外間守善・新里幸昭 1978『南島歌謡大成』Ⅲ宮古篇　角川書店
前沢和之 1995「上野国の馬と牧」『馬の文化叢書』第２巻 馬事文化財団　364-393
宮城長信 1964「根謝銘城調査概報」『琉大史学』第２号
宮古市町村会 1984『宮古畜産史』那覇出版社
宮古島記事 1752『平良市史』第３巻資料編　前近代　平良市役所　1981 所収
宮古島記事仕次 1748『平良市史』第３巻資料編　前近代　平良市役所 1981 所収
宮古島在番記 1780-1894 『平良市史』第３巻資料編　前近代　平良市役所　1981 所収
宮古島市教育委員会 2012『宮古島市史』第１巻　通史編
宮古島市教育委員会 2018『宮古島市史』第２巻　祭祀編
邨岡良弼 1902「古牧考附馬政略」『歴史地理』４－1『馬の文化叢書』第２巻所収
雍正旧記 1727『平良市史 』第３巻資料編　前近代　平良市役所 1981 所収
吉成直樹 2015『琉球史を問い直す』森話社
吉村玄得 1999「石原城址に思う」『広報宮原』13 号

付録

写真１．狩俣集落の東門　門の主は「ニッジャ金殿」の神、
写真２．狩俣集落の北門　2018.12
写真３．狩俣集落を囲む石垣　2018.12
写真４．東平安名崎牧場 1935（昭和 10）年　宮古島市史編さん事務局提供
写真５．高腰城址の「見取り図」　城辺町教育委員会 1989
写真６．西銘城跡の「見取り図」　沖縄県教育委員会 1990
写真７．てまか城跡の石垣　2018．12
写真８．久場嘉城跡の石垣　2018.12
写真９．国頭村比地小玉森の神アサャギ　2017.10
写真 10．国頭村比地小玉森の堀切　2017.10
写真 11．種子島沖ヶ浜田神社　2018.3
写真 12．種子島中種子町の牧の神木　2018.3

写真 13. 千葉県松戸市小金牧の「馬見所」　鈴木純夫氏提供

写真 14. 千葉県松戸市小金牧の「馬採るドテ」　鈴木純夫氏提供

写真１．狩俣集落の東門

写真２．狩俣集落の北門

写真３．狩俣集落を囲む石垣
高さは 150 cmから 160 cm

写真４．東平安名崎牧場 1935（昭和 10）年
宮古島市史編さん事務局提供

写真７．てまか城跡の石垣

写真８．久場嘉城跡の石垣

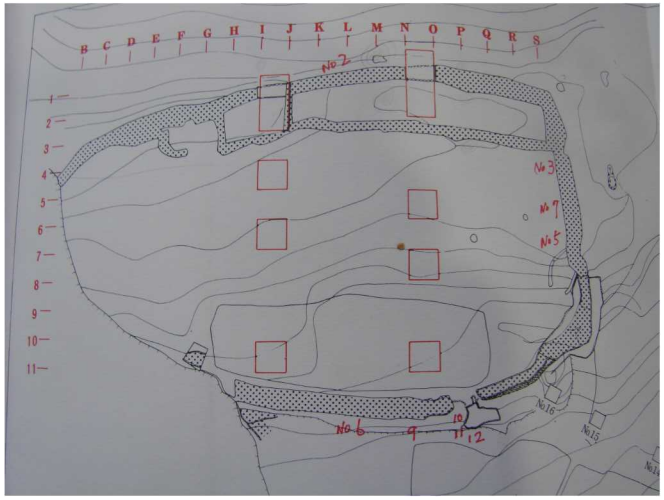


写真５．高腰城址の「見取り図」

（城辺町教委 1989）

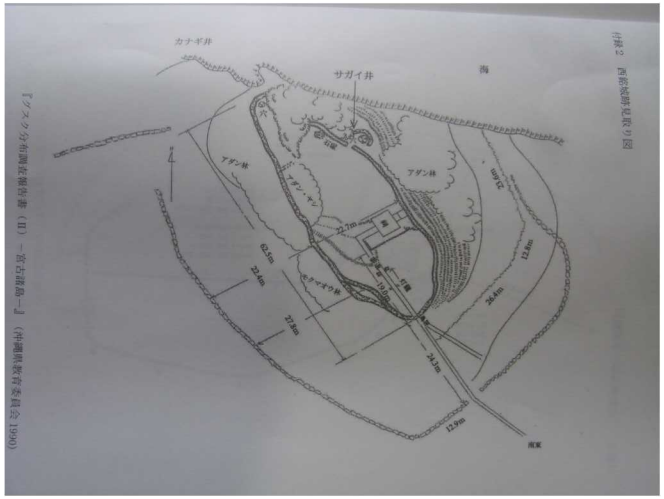


写真６．西銘城跡の「見取り図」

（沖縄県教委 1990）

写真９．国頭村比地小玉森の神アサャギ 2017.10

写真 10．国頭村比地小玉森の堀切

写真 11．種子島沖ヶ浜田神社 2018.3
製塩（1352）と牧の由来をもつ神社

写真 12．種子島の牧の神 2018.3

写真 14. 小金牧の「馬を採るドテ」（龍山堂　1854）
鈴木純夫氏提供

写真 13. 小金牧の馬見所（龍山堂　1854）
鈴木純夫氏提供